

山口重克 著作目録^{* **}

柴崎 慎也 編

凡例

- ・本目録は、日本のマルクス経済学者である山口重克（1932. 7. 27～2021. 9. 11）の著作目録である。
- ・著作物は発行年月日順に配列している。発行日の記載のないもの、不明なものは、各月の末尾に配列している。
- ・各著作物の記載事項は、一部の例外を除き、書籍の場合は、『書籍タイトル』、発行所、発行年月日である。論文・書評・随筆など書籍を除く著作物の場合は、「タイトル』、『所載刊行物名』発行所、巻号数、所載ページ、発行年月日、（備考）である。編者を『所載刊行物名』の前に、〈シリーズ名〉を『所載刊行物名』および『書籍タイトル』の後に付すものもある。
- ・書籍のタイトルは、表紙ないし奥付の表記にしたがった。書籍を除く著作物のタイトルは、当該所載刊行物の目次ではなく、本文の表記にしたがった。ただし、いずれも副題の表記は全て――とした。
- ・初出稿の所在が確認できなかった著作物については、現時点でわかる範囲で情報を記載している。なお、本目録において初出稿の確認ができていない著作物は、「病気の頃のこと」（1992年）、「私の回顧論的傍観者風大学論」（2003年）である。
- ・各項目末尾の●は単著書、■は編書・共著書、▲は単著書に未収録の著作物であることを示している。
- ・本目録および年譜を作成するにあたって、菅原陽心氏より頂戴した「山口重克先生東大退官時業績目録」を参考にした。

1960年代

1961年

「商業信用と銀行信用——信用貨幣流通の意義と限界」, 鈴木鴻一郎編『信用論研究』法政大学出版局, pp. 119-179, 1961年12月(発行日記載なし), (「信用機構と銀行券流通」と改題し『金融機構の理論』に収録).

1963年

「鑄貨論の問題と貨幣論の方法」, 『電気通信大学学報 人文社会編』電気通信大学, 第15号, pp. 21-50, 1963年12月8日, (「鑄貨と貨幣の象徴化」と改題し『金融機構の理論』に収録).

1964年

「商業資本と商業利潤——宇野教授の所説によせて(一)」, 『電気通信大学学報 人文社会編』電気通信大学, 第16号, pp. 79-98, 1964年8月10日, (「宇野弘蔵の問題提起と商業資本論論争」と改題し『競争と商業資本』に収録).

「[マルクス主義発生の歴史的背景(林健太郎)批判」, 『社会主義』社会主義協会, 第155号, pp. 48-54, 1964年9月1日, (北村芳太郎の名義で執筆). ▲

「商業資本と商業利潤(2)——宇野教授の所説によせて(二)」, 『電気通信大学学報 人文社会編』電気通信大学, 第17号, pp. 83-105, 1964年12月8日, (「宇野弘蔵の問題提起と商業資本論論争」と改題し『競争と商業資本』に収録).

1965年

「社会科学と社会工学——社会工学論者批判」, 『電気通信大学新聞』電気通信大学新聞部, 第100号, pp. 43-45, 1965年2月15日, (「社会科学と社会工学」と改題し『経済学・人間・社会』に収録).

1967年

「商業資本と銀行資本(一)」, 『新潟大学法経論集』新潟大学人文学部, 第16巻第2号, pp. 1-34, 1967年2月15日, (「競争の機構としての商業資本」と改題し『競争と商業資本』に収録).

「第三部 ゼミナール」, 宇野弘蔵編『資本論研究I——商品・貨幣・資本』筑摩書房, pp. 217-331, 1967年9月10日. ▲

「商業資本と銀行資本(二)」, 『新潟大学法経論集』新潟大学人文学部, 第17巻第1・2合

併号, pp.1-56, 1967年9月16日, (「競争の機構としての商業資本」と改題し『競争と商業資本』に収録).

「第三部 ゼミナール」, 宇野弘蔵編『資本論研究Ⅱ——剰余価値・蓄積』筑摩書房, pp.215-300, 1967年10月25日. ▲

「第三部 ゼミナール」, 宇野弘蔵編『資本論研究Ⅲ——資本の流過程』筑摩書房, pp.249-350, 1967年12月10日. ▲

1968年

「第一部 解説」, 宇野弘蔵編『資本論研究Ⅳ——生産価格・利潤』筑摩書房, pp.1-157, 1968年1月25日. ▲

「第二部 問題点」, 宇野弘蔵編『資本論研究Ⅳ——生産価格・利潤』筑摩書房, pp.159-242, 1968年1月25日, (④⑤は「マルクスの市場価値論」と題し『価値論の射程』に収録). ▲

「第三部 ゼミナール」, 宇野弘蔵編『資本論研究Ⅳ——生産価格・利潤』筑摩書房, pp.243-340, 1968年1月25日. ▲

「異端と通説と正統」, 宇野弘蔵編『資本論研究Ⅳ——生産価格・利潤』筑摩書房, 月報 No.4, pp.1-3, 1968年1月25日, (『経済学・人間・社会』に収録).

「[「大国日本」の後進性]」, 『新潟県教育月報』新潟県教育庁企画行政課, 第18巻第11号(通巻209号), pp.38-40, 1968年2月20日. ▲

「第三部 ゼミナール」, 宇野弘蔵編『資本論研究Ⅴ——利子・地代』筑摩書房, pp.329-438, 1968年4月25日. ▲

「商業資本の研究」, 博士学位論文(東京大学), 1968年9月30日, (『競争と商業資本』に収録).

「信用恐慌論の方法——武井邦夫氏の宇野説批評の検討」, 鈴木鴻一郎編『マルクス経済学の研究 上』〈宇野弘蔵先生古稀記念〉東京大学出版会, pp.319-336, 1968年9月30日, (「信用恐慌論の方法——純粋資本主義論」と改題し『資本論の読み方』に収録).

1969年

「岡橋保編『金融論体系』」(書評), 『週刊金融財政事情』金融財政事情研究会, 第939号, p.45, 1969年5月26日. ▲

「桜井毅著 生産価格の理論」(書評), 『日本読書新聞』日本出版協会, 第1501号, p.6, 1969年6月23日, (『経済学・人間・社会』に収録).

鈴木鴻一郎編『現代アメリカ資本主義年表』〈東京大学経済学部日本産業経済研究資料

第6集), 東京大学出版会, 1969年10月20日, (年表の作成). ▲

1970年代

1970年

「価値表章」, 「貨幣」, 「貨幣流通の法則」, 「貨幣としての金」, 「計算貨幣」, 「支払手段」, 「紙幣」, 「生産価格」, 「世界貨幣」, 「蓄蔵貨幣」, 「鑄貨」, 「超過利潤」, 「補助貨幣」, 「流通手段」, 『グランド現代百科事典』全23巻, 学習研究社, 第5巻 p.185, 第5巻 pp.329-330, 第5巻 p.339, 第7巻 pp.38-39, 第7巻 p.489, 第10巻 p.277, 第10巻 p.287, 第12巻 p.55, 第12巻 p.140, 第13巻 p.290, 第13巻 pp.383-384, 第13巻 p.477, 第18巻 p.243, 第20巻 p.233, 1970年10月1日 (1978年5月1日 完結). ▲

「[それ自身に利子を生むものとしての資本]の問題点」, 武田隆夫・遠藤湘吉・大内力編『資本論と帝国主義論 上——資本論の形成と展開』(鈴木鴻一郎教授還暦記念)東京大学出版会, pp.413-430, 1970年11月30日, (「資本の物神性——それ自身に利子を生むものとしての資本の問題点」と改題し『資本論の読み方』に収録).

1971年

「後藤泰二著 株式会社の経済理論」(書評), 『日本読書新聞』日本出版協会, 第1583号, p.6, 1971年2月15日. ▲

『現代金融の理論』, 時潮社, 1971年11月5日, (小野英祐・志村嘉一・玉野井昌夫・春田素夫との共著). ■

「はじめに」, 小野英祐・志村嘉一・玉野井昌夫・春田素夫・山口重克著『現代金融の理論』時潮社, pp.1-4, 1971年11月5日, (「筆者一同」とクレジット). ▲

「金融の原理的機構」, 小野英祐・志村嘉一・玉野井昌夫・春田素夫・山口重克著『現代金融の理論』時潮社, pp.3-41, 1971年11月5日, (『金融機構の理論』に収録).

1972年

「第1編第2章III 『資本論』第三巻」, 鈴木鴻一郎編『マルクス経済学講義』(青林講義シリーズ)青林書院新社, pp.59-112, 1972年9月25日, (「『資本論』の利子論」と改題し『金融機構の理論』に収録).

「第1編第3章 『資本論』の諸問題」, 鈴木鴻一郎編『マルクス経済学講義』(青林講義シリーズ)青林書院新社, pp.113-134, 1972年9月25日. ▲

『宇野弘蔵をどうとらえるか』, 芳賀書店, 1972年11月20日, (清水正徳・海原凜・岩田

弘・桜井毅・鎌倉孝夫・大内秀明・降旗節雄・山口勇との共著). ■

「労働生産過程と価値の実体規定」, 清水正徳・海原凜・岩田弘・山口重克・桜井毅・鎌倉孝夫・大内秀明・降旗節雄・山口勇著『宇野弘蔵をどうとらえるか』芳賀書店, pp. 131-164, 1972 年 11 月 20 日, (『価値論の射程』に収録).

1973 年

「開講のことば」, 『NHK 大学講座 経済学 2——資本論と現代』日本放送協会, p. 2, 1973 年 1 月 1 日, (時永淑・馬渡尚憲・川上忠雄・佐々木隆雄・小林謙一との共同クレジット). ▲

「第 4 章 総過程論」, 『NHK 大学講座 経済学 2——資本論と現代』日本放送協会, pp. 74-100, 1973 年 1 月 1 日, (「競争の機構としての商業資本」と改題し『競争と商業資本』に収録).

「伊藤 誠著 信用と恐慌」(書評), 『日本読書新聞』日本出版協会, 第 1713 号, p. 6, 1973 年 7 月 9 日, (『経済学・人間・社会』に収録).

1974 年

「解説」, 『宇野弘蔵著作集 第四巻——マルクス経済学原理論の研究』岩波書店, pp. 457-468, 1974 年 1 月 16 日, (『宇野弘蔵著作集』第四巻」と改題し『経済学・人間・社会』に収録).

「産業循環」, 鈴木鴻一郎編著『マルクス経済学』〈セミナー経済学教室 1〉日本評論社, pp. 218-231, 1974 年 5 月 30 日, (「恐慌と金融機構」と改題し『金融機構の理論』に収録).

1975 年

「鎌倉孝夫『経済学方法論序説』」(書評), 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 40 巻第 4 号, pp. 119-124, 1975 年 1 月 1 日. ▲

「宇野弘蔵と『資本論』」, 『現代思想』青土社, 第 3 巻第 13 号 (12 月臨時増刊号), pp. 158-168, 1975 年 12 月 20 日, (『資本論の読み方』に収録).

1976 年

「商業資本論と競争論 (1)」, 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 41 巻第 4 号, pp. 2-17, 1976 年 1 月 1 日, (『資本論』の商業資本論」と改題し『競争と商業資本』に収録).

「商業資本論と競争論 (2)」, 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 42 巻第 3 号, pp. 11-25, 1976 年 10 月 1 日, (『資本論』の商業資本論」と改題し『競争と商業資本』に

収録).

『資本論研究入門』, 東京大学出版会, 1976年10月30日, (大内秀明・桜井毅との共編).

■

「はしがき」, 大内秀明・桜井毅・山口重克編『資本論研究入門』東京大学出版会, pp.1-2, 1976年10月30日, (「編者」とクレジット). ▲

「第二章 貨幣・資本」, 大内秀明・桜井毅・山口重克編『資本論研究入門』東京大学出版会, pp.65-86, 1976年10月30日, (「貨幣と資本形式——流通形態論の方法」と改題し『資本論の読み方』に収録).

「7 信用と恐慌——資本蓄積の現実的機構」, 大内秀明・鎌倉孝夫編『経済原論』〈有斐閣新書 基本経済学シリーズ〉有斐閣, pp.185-211, 1976年11月10日, (「7-1 信用と利子」は▲. 「7-2 産業循環と恐慌」は「恐慌と金融機構」と改題し『金融機構の理論』に収録. 「7-3 商業利潤」は「競争の機構としての商業資本」と改題し『競争と商業資本』に収録).

1977年

「編集後記」, 『社会科学のために』時潮社, 第2号, p.47, 1977年1月31日. ▲

『資本論を学ぶI——第一巻・資本の生産過程(上)』〈有斐閣選書〉, 有斐閣, 1977年6月25日, (佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄との共編). ■

「はしがき」, 佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄・山口重克編『資本論を学ぶI——第一巻・資本の生産過程(上)』〈有斐閣選書〉, 有斐閣, pp.1-3, 1977年6月25日, (佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄との共同クレジット). ▲

『資本論を学ぶII——第一巻・資本の生産過程(下)』〈有斐閣選書〉, 有斐閣, 1977年7月15日, (佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄との共編). ■

「経済学における自立の論理と完結性」, 『思想』岩波書店, 第638号, pp.79-93, 1977年8月5日, (『資本論の読み方』に収録).

『資本論を学ぶIV——第三巻・資本主義的生産の総過程(上)』〈有斐閣選書〉, 有斐閣, 1977年8月20日, (佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄との共編). ■

「1 第三巻「資本主義的生産の総過程」の対象と課題——第三巻と第一巻・第二巻との関係」, 佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄・山口重克編『資本論を学ぶIV——第三巻・資本主義的生産の総過程(上)』〈有斐閣選書〉有斐閣, pp.1-18, 1977年8月20日. ▲

「16 商業資本の自立化——商業資本の本質と機能」, 佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄・山口重克編『資本論を学ぶIV——第三巻・資本主義的生産の総過程(上)』〈有斐閣選書〉有斐閣, pp.234-249, 1977年8月20日, (「商業資本論論争」と改題し『競争

と商業資本』に収録. 16-1 「『資本論』の内容」は▲).

「17 商業利潤と流通費用——流通過程の資本の独自性」, 佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄・山口重克編『資本論を学ぶIV——第三卷・資本主義的生産の総過程(上)』〈有斐閣選書〉有斐閣, pp.250-270, 1977年8月20日, (「商業資本論論争」と改題し『競争と商業資本』に収録. 17-1 「『資本論』の内容」は▲).

「宇野理論の成果と今後の課題 第一部=原理論」(報告と討論), 『経済学批判 臨時増刊』社会評論社, 宇野弘蔵追悼号, pp.4-13 (報告), pp.14-43 (討論), 1977年9月1日, (報告は「宇野原理論の成果と残された課題」と改題し『資本論の読み方』に収録. 討論は▲).

『資本論を学ぶIII——第二卷・資本の流通過程』〈有斐閣選書〉, 有斐閣, 1977年9月30日, (佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄との共編). ■

『資本論を学ぶV——第三卷・資本主義的生産の総過程(下)』〈有斐閣選書〉, 有斐閣, 1977年12月15日, (佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄との共編). ■

1978年

『論争・転形問題——価値と生産価格』, 東京大学出版会, 1978年3月15日, (伊藤誠・桜井毅との共編訳). ■

「はしがき」, 伊藤誠・桜井毅・山口重克編訳『論争・転形問題——価値と生産価格』東京大学出版会, pp.i-iii, 1978年3月15日, (伊藤誠・桜井毅との共同クレジット). ▲

K. メイ著「価値と生産価格——ウィンターニッツの解法についての覚書」(翻訳), 伊藤誠・桜井毅・山口重克編訳『論争・転形問題——価値と生産価格』東京大学出版会, pp.29-33, 1978年3月15日. ▲

M. H. ドップ著「転形問題への補足コメント」(翻訳), 伊藤誠・桜井毅・山口重克編訳『論争・転形問題——価値と生産価格』東京大学出版会, pp.64-65, 1978年3月15日. ▲

「解説」, 伊藤誠・桜井毅・山口重克編訳『論争・転形問題——価値と生産価格』東京大学出版会, pp.225-240, 1978年3月15日, (「編者」とクレジット). ▲

『欧米マルクス経済学の新展開』, 東洋経済新報社, 1978年4月12日, (伊藤誠・桜井毅との共編・監訳). ■

「はしがき」, 伊藤誠・桜井毅・山口重克共編・監訳『欧米マルクス経済学の新展開』東洋経済新報社, pp.i-ii, 1978年4月12日, (「編者」とクレジット). ▲

「序 欧米マルクス経済学の新展開」, 伊藤誠・桜井毅・山口重克共編・監訳『欧米マルクス経済学の新展開』東洋経済新報社, pp.1-19, 1978年4月12日, (伊藤誠・桜井毅との共同クレジット). ▲

山口重克 著作目録

- 「発券の集中と独占——川合一郎教授の発券集中論の検討」, 日高普・大谷瑞郎・斎藤仁・戸原四郎編『マルクス経済学——理論と実証』東京大学出版会, pp.85-98, 1978年6月15日, (「発券の集中と独占——中央銀行論の問題点」と改題し『資本論の読み方』に収録).
- 『マルクス経済学の現状と展望』〈講座 現代経済思潮 第2巻〉, 東洋経済新報社, 1978年12月28日, (大内秀明・桜井毅との共編). ■
- 「はしがき」, 大内秀明・桜井毅・山口重克編『マルクス経済学の現状と展望』〈講座 現代経済思潮 第2巻〉東洋経済新報社, pp.i-iv, 1978年12月28日, (大内秀明・桜井毅との共同クレジット). ▲
- 「流通と価値」, 大内秀明・桜井毅・山口重克編『マルクス経済学の現状と展望』〈講座 現代経済思潮 第2巻〉東洋経済新報社, pp.93-118, 1978年12月28日, (『価値論の射程』に収録).

1979年

- 「晩年の宇野先生」, 宇野マリア編『思い草』〈宇野弘蔵追悼文集〉非売品, pp.104-108, 1979年2月22日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 『経済原論』〈経済学叢書〉, 世界書院, 1979年3月20日, (桜井毅・浜田好通・春田素夫・永谷清・河西勝との共著). ■
- 「はしがき」, 桜井毅・浜田好通・春田素夫・山口重克・永谷清・河西勝著『経済原論』〈経済学叢書〉世界書院, pp.iii-v, 1979年3月20日, (「著者」とクレジット). ▲
- 「第一篇第三章 資本」, 桜井毅・浜田好通・春田素夫・山口重克・永谷清・河西勝著『経済原論』〈経済学叢書〉世界書院, pp.74-86, 1979年3月20日. ▲
- 「第二篇第一章 資本の生産過程」, 桜井毅・浜田好通・春田素夫・山口重克・永谷清・河西勝著『経済原論』〈経済学叢書〉世界書院, pp.91-123, 1979年3月20日. ▲
- 「原理論の課題と方法——鎌倉孝夫氏の批判に答える」, 『経済学批判』社会評論社, 第6号, pp.131-146, 1979年4月28日, (「原理論の課題と方法」と改題し『資本論の読み方』に収録).
- 「貸付資本」, 「擬制資本」, 「信用制度」, 「生産価格」, 「利子 (II)」, 小泉明・川口弘・伊達邦春・加藤寛編『現代経済学辞典』青林書院新社, p.114, pp.168-169, pp.501-502, pp.523-524, pp.841-842, 1979年6月5日, (「信用制度」は『経済学・人間・社会』に収録). ▲
- 「競争と信用」, 有斐閣, 1979年8月25日, (侘美光彦・伊藤誠との共編). ■
- 「はしがき」, 山口重克・侘美光彦・伊藤誠編『競争と信用』有斐閣, pp.1-4, 1979年8月25日, (侘美光彦・伊藤誠との共同クレジット). ▲

1980 年代

1980 年

『経済学 I——資本主義経済の基礎理論』〈有斐閣大学双書〉, 有斐閣, 1980 年 4 月 30 日, (桜井毅・佐美光彦・伊藤誠との共編). ■

「はしがき」, 桜井毅・山口重克・佐美光彦・伊藤誠編『経済学 I——資本主義経済の基礎理論』〈有斐閣大学双書〉有斐閣, pp. i-iii, 1980 年 4 月 30 日, (「編者」とクレジット). ▲

「第 II 部第 1 章 『資本論』の方法」, 桜井毅・山口重克・佐美光彦・伊藤誠編『経済学 I——資本主義経済の基礎理論』〈有斐閣大学双書〉有斐閣, pp. 80-99, 1980 年 4 月 30 日, (『資本論の読み方』に収録).

「第 III 部第 3 章 利子論」, 桜井毅・山口重克・佐美光彦・伊藤誠編『経済学 I——資本主義経済の基礎理論』〈有斐閣大学双書〉有斐閣, pp. 334-360, 1980 年 4 月 30 日, (「マルクス信用理論の体系化——宇野理論の展開」と改題し『金融機構の理論』に収録).

「『資本論』と晩年のマルクス」, 鈴木鴻一郎責任編集『世界の名著 54——マルクス・エンゲルス I』〈中公バックス〉中央公論社, 付録 74, pp. 1-4, 1980 年 9 月 20 日, (『資本論の読み方』に収録).

『経済学 II——資本主義経済の発展』〈有斐閣大学双書〉, 有斐閣, 1980 年 9 月 30 日, (桜井毅・佐美光彦・伊藤誠との共編). ■

「はしがき」, 桜井毅・山口重克・佐美光彦・伊藤誠編『経済学 II——資本主義経済の発展』〈有斐閣大学双書〉有斐閣, pp. i-ii, 1980 年 9 月 30 日, (「編者」とクレジット). ▲

「過剰生産」, 「株式会社」, 「貨幣取引資本」, 「競争」, 「高利資本」, 「商業資本」, 岡崎次郎編集代表『現代マルクス=レーニン主義事典 上』社会思想社, pp. 244-245, pp. 283-287, pp. 299-300, pp. 408-410, pp. 594-595, pp. 968-971, 1980 年 11 月 30 日, (『経済学・人間・社会』に収録. 「高利資本」は▲).

1981 年

「戦後日本の『資本論』研究と宇野理論」(報告と討論), 佐伯尚美・佐美光彦・石川経夫編『マルクス経済学の現代的課題』〈東京大学産業経済研究叢書 コンファレンス・シリーズ〉東京大学出版会, pp. 11-28 (報告), pp. 29-51 (討論), 1981 年 1 月 20 日, (報告は『『資本論』研究の現状——戦後日本の『資本論』研究と宇野理論』と改題し『資本論の読み方』に収録. 討論は「本質規定と分析基準」と題し『類型論の諸問題』

山口重克 著作目録

に収録).

1982年

「歴史と経済学——宇野弘蔵の歴史観の一考察」, 『現代の解説』 児童文学を研究する会, 創刊号, pp.2-7, 1982年8月(発行日記載なし), (「歴史と経済学——宇野弘蔵の歴史観」と改題し『資本論の読み方』に収録).

1983年

『競争と商業資本』, 岩波書店, 1983年2月24日. ●

『現代金融の理論と構造』, 東洋経済新報社, 1983年5月30日, (志村嘉一・小野英祐・佐々木隆雄・春田素夫との共著). ■

「はじめに」, 志村嘉一・山口重克・小野英祐・佐々木隆雄・春田素夫著『現代金融の理論と構造』 東洋経済新報社, pp.i-ii, 1983年5月30日, (「筆者一同」とクレジット).

▲

「金融機構の原理」, 志村嘉一・山口重克・小野英祐・佐々木隆雄・春田素夫著『現代金融の理論と構造』 東洋経済新報社, pp.13-37, 1983年5月30日. ▲

「科学的社会主義とは何か」, 『経済評論』 日本評論社, 復刊第32巻第8号, pp.82-83, 1983年8月1日, (『経済学・人間・社会』に収録).

『資本論の読み方——宇野弘蔵に学ぶ』, 有斐閣, 1983年9月25日, (「はしがき——『資本論』の読み方」は「『資本論』と宇野理論」と改題し『経済学・人間・社会』に収録). ●

「冒頭商品の価値の規定について」, 『経済学論集』 東京大学経済学会, 第49巻第3号, pp.47-61, 1983年10月1日, (『価値論の射程』に収録).

『価値論の新展開』〈マルクス経済学叢書1〉, 社会評論社, 1983年12月20日, (伊藤誠・桜井毅との共編). ■

「はしがき」, 伊藤誠・桜井毅・山口重克共編『価値論の新展開』〈マルクス経済学叢書1〉 社会評論社, pp.1-3, 1983年12月20日, (伊藤誠・桜井毅との共同クレジット).

▲

1984年

『金融機構の理論』, 東京大学出版会, 1984年2月20日. ●

『利子論の新展開』〈マルクス経済学叢書2〉, 社会評論社, 1984年3月15日, (伊藤誠・桜井毅との共編). ■

「はしがき」, 伊藤誠・桜井毅・山口重克編『利子論の新展開』〈マルクス経済学叢書2〉

- 社会評論社, pp. 1-3, 1984 年 3 月 15 日, (伊藤誠・桜井毅との共同クレジット). ▲
- 「利子論の課題」, 伊藤誠・桜井毅・山口重克編『利子論の新展開』〈マルクス経済学叢書 2〉社会評論社, pp. 9-16, 1984 年 3 月 15 日. ▲
- 「商業資本論の諸問題」(研究ノート), 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 50 巻第 2 号, pp. 71-85, 1984 年 7 月 1 日, (「日高普の問題提起とその検討」と改題し『商業資本論の諸問題』に収録).
- 「批評について」, 『育英会報』日本育英会, 第 215 号, p. 1, 1984 年 7 月 5 日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 「武生で過ごした頃」, 『ふるさと福井』フェニックス出版, 第 6 号, pp. 38-39, 1984 年 9 月 1 日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 『二つの経済学——対立から対話へ』〈東京大学産業経済研究叢書 コンファレンス・シリーズ〉, 東京大学出版会, 1984 年 9 月 30 日, (根岸隆との共編). ■
- 「はしがき」, 根岸隆・山口重克編『二つの経済学——対立から対話へ』〈東京大学産業経済研究叢書 コンファレンス・シリーズ〉東京大学出版会, pp. i-ii, 1984 年 9 月 30 日, (根岸隆との共同クレジット). ▲
- 「第 1 章 報告 II コメント 4」, 「第 1 章 報告 II 報告をめぐる討論 (要約)」, 根岸隆・山口重克編『二つの経済学——対立から対話へ』〈東京大学産業経済研究叢書 コンファレンス・シリーズ〉東京大学出版会, pp. 43-45, pp. 46-50, 1984 年 9 月 30 日. ▲
- 「経済的諸関係と行動主体」, 『経済評論』日本評論社, 復刊第 33 巻第 10 号, pp. 2-18, 1984 年 10 月 1 日, (『価値論の射程』に収録. 「4 資本と資本家」は▲).
- 「宇野弘蔵」, 『平凡社大百科事典 2』平凡社, p. 307, 1984 年 11 月 2 日. ▲
- 「弱虫礼讃」, 『現代の解説』現代の解説社, 第 2 号, pp. 2-4, 1984 年 11 月 (発行日記載なし), (『経済学・人間・社会』に収録).
- 「経済原則と経済法則」, 『現代の解説』現代の解説社, 第 2 号, pp. 14-34, 1984 年 11 月 (発行日記載なし), (『価値論の射程』に収録).
- 『マルクス経済学・方法と理論』, 時潮社, 1984 年 12 月 20 日, (平林千牧との共編). ■
- 「はしがき」, 山口重克・平林千牧編『マルクス経済学・方法と理論』時潮社, pp. i-ii, 1984 年 12 月 20 日, (「編者」とクレジット). ▲
- 「いわゆる「方法の模写」について」, 山口重克・平林千牧編『マルクス経済学・方法と理論』時潮社, pp. 1-14, 1984 年 12 月 20 日, (『価値論の射程』に収録).

1985 年

- 「商業資本論の諸問題 (2)」(研究ノート), 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 50 巻第

- 4号, pp.16-27, 1985年1月1日, (「阿部真也の問題提起とその検討」および「村上和光の問題提起とその検討」と改題し『商業資本論の諸問題』に収録).
- 『恐慌論の新展開』〈マルクス経済学叢書3〉, 社会評論社, 1985年4月25日, (伊藤誠・桜井毅との共編). ■
- 「はしがき」, 伊藤誠・桜井毅・山口重克編『恐慌論の新展開』〈マルクス経済学叢書3〉社会評論社, pp.1-3, 1985年4月25日, (伊藤誠・桜井毅との共同クレジット). ▲
- 『経済原論講義』, 東京大学出版会, 1985年12月15日. ●

1986年

- 「商業資本論の諸問題(3)」(研究ノート), 『経済学論集』東京大学経済学会, 第52巻第2号, pp.79-95, 1986年7月1日, (「安井修二の問題提起とその検討」と改題し『商業資本論の諸問題』に収録).
- 「現代と職人気質」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第30407号, p.19, 1986年7月14日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 「本当の豊かさとは」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第30424号, p.21, 1986年7月31日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 「軍拡と平和運動」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第30439号, p.21, 1986年8月16日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 「学問は「鈍才」向き」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第30449号, p.17, 1986年8月26日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 「管理はほどほどに」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第30469号, p.17, 1986年9月15日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 「価値の概念と社会的必要労働」, 『経済学論集』東京大学経済学会, 第52巻第3号, pp.21-32, 1986年10月1日, (『価値論の射程』に収録).
- 「国際化時代に思う」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第30484号, p.25, 1986年10月1日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 「思想の言葉」, 『思想』岩波書店, 第748号, pp.68-69, 1986年10月5日, (「貨幣論の方法」と題し『金融機構の理論の諸問題』および『経済学・人間・社会』に収録).
- 「効率化か便利さか」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第30502号, p.21, 1986年10月19日, (「効率化の落とし穴」と改題し『経済学・人間・社会』に収録).
- 「老人問題の論じ方」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第30513号, p.21, 1986年10月30日, (『経済学・人間・社会』に収録).
- 「女性の時代に思う」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第30528号, p.21, 1986年11月15日, (『経済学・人間・社会』に収録).

「自衛官募集に思う」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第 30544 号, p.17, 1986 年 12 月 1 日, (『経済学・人間・社会』に収録).

「民活の歴史的意味」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第 30566 号, p.17, 1986 年 12 月 23 日, (『経済学・人間・社会』に収録).

「禁煙と日記の続け方」, 『福井新聞』〈けさの随想〉福井新聞社, 第 30571 号, p.17, 1986 年 12 月 28 日, (『経済学・人間・社会』に収録).

1987 年

「馬場宏二著『富裕化と金融資本』」(書評), 『社会科学研究』東京大学社会科学研究所, 第 38 巻第 5 号, pp.289-299, 1987 年 1 月 31 日, (『経済学・人間・社会』に収録).

「商業資本論の諸問題 (4)」(研究ノート), 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 53 巻第 2 号, pp.45-58, 1987 年 7 月 1 日, (「青才高志の問題提起とその検討」と改題し『商業資本論の諸問題』に収録).

「労働価値論の射程」, 『現代の解説』現代の解説社, 第 3 号, pp.7-16, 1987 年 8 月 (発行日記載なし), (『価値論の射程』に収録).

「商業資本論の諸問題 (5)」(研究ノート), 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 53 巻第 3 号, pp.92-101, 1987 年 10 月 1 日, (「青才高志の問題提起とその検討」と改題し『商業資本論の諸問題』に収録).

『価値論の射程』, 東京大学出版会, 1987 年 11 月 10 日. ●

1988 年

「商業信用論の諸問題 (1)」, 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 53 巻第 4 号, pp.22-35, 1988 年 1 月 1 日, (「商業信用=貨幣貸付説をめぐる諸問題」と改題し『金融機構の理論の諸問題』に収録).

「商業信用論の諸問題 (2)」, 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 54 巻第 1 号, pp.76-86, 1988 年 4 月 1 日, (「手形の期限の問題」と改題し『金融機構の理論の諸問題』に収録).

「経済原論のすすめ」, 『UP』東京大学出版会, 第 17 巻第 4 号 (通巻 186 号), pp.29-33, 1988 年 4 月 5 日, (『経済学・人間・社会』に収録).

「オリジナリティとは」, 『育英会報』日本育英会, 第 261 号, 1988 年 5 月 5 日, (『経済学・人間・社会』に収録).

「商業信用論の諸問題 (3)」, 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 54 巻第 2 号, pp.56-67, 1988 年 7 月 1 日, (「商業信用と利子の問題」と改題し『金融機構の理論の諸問題』に収録).

「商業信用論の諸問題 (4・完)」, 『経済学論集』 東京大学経済学会, 第 54 卷第 3 号, pp.93-109, 1988 年 10 月 1 日, (「商業信用の限界をめぐる問題」と改題し『金融機構の理論の諸問題』に収録).

1989 年

「津軽半島の旅——「太宰」を追って小泊へ…」, 『東京と青森』 東京青森県人会, 第 22 巻第 4 号 (通巻 252 号), pp.6-9, 1989 年 4 月 10 日, (「津軽半島の旅 (1)」と改題し『経済学・人間・社会』に収録).

1990 年代

1990 年

「青森大好き人間の経済学的ヤキモキ」, 『東京と青森』 東京青森県人会, 第 24 巻第 1 号 (通巻 261 号), pp.8-10, 1990 年 1 月 10 日, (「津軽半島の旅 (2)」と改題し『経済学・人間・社会』に収録).

「マルクスは死んだのか——「マル経」学者七人を直撃する」(インタビュー), 『文藝春秋』 文藝春秋, 第 68 巻第 2 号, pp.114-129, 1990 年 2 月 1 日. ▲

「いなかの家の改築のこと」, 『FUKUVI』 フクビ化学工業 (株) FUKUVI 編集室, VOL.5, pp.2-3, 1990 年 5 月 (発行日記載なし), (『経済学・人間・社会』に収録).

「経済学部唯野教授」(インタビュー), 『AERA』 朝日新聞社, 第 3 巻第 32 号 (通巻 119 号), p.33, 1990 年 8 月 14 日. ▲

「価値概念の拡張の必要について」, 『現代の解説』 現代の解説社, 第 4 号, pp.1-4, 1990 年 9 月 (発行日記載なし). ▲

「流通費用といわゆる価値形成について——新田滋氏の批評に答える」, 『コンセプト・ワールド』 CN 編集局, 第 2 号, pp.6-33, 1990 年 9 月 (発行日記載なし), (『価値論・方法論の諸問題』に収録).

「価値概念の広義化をめぐる」, 「コメントへのリプライ I」, 「一般討論」, 『経済理論学会年報』 経済理論学会事務局, 第 27 集, pp.6-16, p.39, pp.41-52, 1990 年 10 月 15 日, (「価値概念の広義化をめぐる」は「価値概念の広義化の提唱」と改題し『価値論・方法論の諸問題』に収録). ▲

「小泊の民宿で合宿, 研究会」(インタビュー), 『東奥日報』 東奥日報社, 第 35546 号, p.13, 1990 年 10 月 23 日. ▲

1991 年

「マル経学者 受難の時代」(インタビュー), 『日本経済新聞』日本経済新聞社, 第 37862 号, p.56, 1991 年 3 月 18 日. ▲

「価値概念について——降旗氏の批評に答える」, 『月刊 状況と主体』谷沢書房, 第 184 号, pp.97-106, 1991 年 3 月 20 日, (『価値論・方法論の諸問題』に収録).

「価値概念の広義化再論——降旗節雄氏の反論に答える」, 『月刊 状況と主体』谷沢書房, 第 187 号, pp.129-141, 1991 年 6 月 20 日, (『価値論・方法論の諸問題』に収録).

1992 年

「経済学のいわゆる危機について」, 『国士舘大学新聞』学校法人国士舘, 第 332 号, p.2, 1992 年 1 月 27 日, (『経済学・人間・社会』に収録).

『市場システムの理論——市場と非市場』(編書), 御茶の水書房, 1992 年 3 月 1 日. ■

「はしがき」, 山口重克編『市場システムの理論——市場と非市場』御茶の水書房, pp.i-vii, 1992 年 3 月 1 日, (「ソ連・東欧社会主義の崩壊とマルクス経済学」と改題し『経済学・人間・社会』に収録).

「段階論の理論的必然性——原理論におけるいくつかのブラック・ボックス」, 山口重克編『市場システムの理論——市場と非市場』御茶の水書房, pp.3-22, 1992 年 3 月 1 日, (『経済学・人間・社会』および「類型論の理論的要請」と改題し『類型論の諸問題』に収録).

『《資本論》百題論争(一)』《《資本論》研究译丛》, 山东人民出版社, 1992 年 6 月(発行日記載なし), (佐藤金三郎・降旗節雄・岡崎栄松との共編, 刘焱・赵洪・陈家英 訳).

■

『《資本論》百題論争(二)』《《資本論》研究译丛》, 山东人民出版社, 1992 年 6 月(発行日記載なし), (佐藤金三郎・降旗節雄・岡崎栄松との共編, 刘焱・赵洪・陈家英 訳).

■

『《資本論》百題論争(三)』《《資本論》研究译丛》, 山东人民出版社, 1992 年 6 月(発行日記載なし), (佐藤金三郎・降旗節雄・岡崎栄松との共編, 刘焱・赵洪・陈家英 訳).

■

「五十九 第三卷《资本主义生产的总过程》的对象和课题——关于第三卷同第一, 二卷的关系——」, 佐藤金三郎・降旗節雄・岡崎栄松・山口重克編, 刘焱・赵洪・陈家英译『《資本論》百題論争(三)』《《資本論》研究译丛》山东人民出版社, pp.1-15, 1992 年 6 月(発行日記載なし). ▲

「七十四 商业资本的独立化——商业资本的本质和职能——」, 佐藤金三郎・降旗節雄・岡崎栄松・山口重克編, 刘焱・赵洪・陈家英译『《資本論》百題論争(三)』《《資本論》

研究译丛〉山东人民出版社, pp. 212-225, 1992年6月(発行日記載なし). ▲

「七十五 商业利润和流通过程的资本的独立性——」, 佐藤金三郎・降旗节雄・岡崎栄松・山口重克編, 刘焱・赵洪・陈家英译『《资本论》百题论争(三)』〈《资本论》研究译丛〉山东人民出版社, pp. 226-224, 1992年6月(発行日記載なし). ▲

『経済学・人間・社会』, 時潮社, 1992年7月10日. ●

「病気の頃のこと」, 所載刊行物名不明, (『経済学・人間・社会』に収録).

「日本のマルクス経済学の理論(とりわけ方法論)の現段階」(ディスカッションペーパー), 『Discussion Papers J-Series』日本経済国際共同研究センター(CIRJE), 92-J-6, pp. 1-18, 1992年9月(発行日記載なし), (『経済学論集』東京大学経済学会, 第59巻第1号, 1993年4月1日に収録).

1993年

「日本のマルクス経済学の理論(とりわけ方法論)の現段階」, 『経済学論集』東京大学経済学会, 第59巻第1号, pp. 91-101, 1993年4月1日, (「日本のマルクス経済学の方法論の現段階」と改題し『価値論・方法論の諸問題』に収録).

「私と「原理論」「段階論」」, 『経済評論』日本評論社, 復刊第42巻第5号, pp. 162-172, 1993年5月1日, (「私にとってのマルクス経済学・宇野経済学」と改題し『価値論・方法論の諸問題』に収録).

「『貨幣論』岩井克人著」(書評), 『エコノミスト』毎日新聞社, 第71巻第25号(通巻3069号), pp. 120-121, 1993年6月8日, (『金融機構の理論の諸問題』に収録).

1994年

『市場経済——歴史・思想・現在』(編書), 名古屋大学出版会, 1994年4月20日. ■

「はしがき」, 山口重克編『市場経済——歴史・思想・現在』名古屋大学出版会, pp. i-ii, 1994年4月20日. ▲

「序論 市場経済と経済学」, 山口重克編『市場経済——歴史・思想・現在』名古屋大学出版会, pp. 1-7, 1994年4月20日, (『価値論・方法論の諸問題』に収録).

「第I編第2章 商業の時代」, 山口重克編『市場経済——歴史・思想・現在』名古屋大学出版会, pp. 31-48, 1994年4月20日, (「商業の生成と世界展開」と改題し『現実経済論の諸問題』に収録).

「流通研究の基本問題——経済理論の立場から」, 『流通』日本流通学会, 第7号, pp. 8-17, 1994年10月20日, (「流通の原理的研究の基本問題」と改題し『価値論・方法論の諸問題』に収録).

1995 年

- 「廣松渉の価値・貨幣論と宇野経済学——廣松渉『物象化論と経済学批判』（廣松渉コレクション第四巻）」（書評），『思想』岩波書店，第 852 号，pp.118-135，1995 年 6 月 5 日，（「廣松渉の価値・貨幣論を読む」と改題し『価値論・方法論の諸問題』に収録）。
- 「抽象的人間労働と価値法則」，『情況』情況出版，第 2 期第 6 巻第 7 号，pp.26-34，1995 年 8 月 1 日，（『価値論・方法論の諸問題』に収録）。

1996 年

- 「廣松とのかこと」，『廣松渉著作集 第 12 巻——資本論の哲学』岩波書店，月報 4，pp.3-6，1996 年 9 月 6 日。▲
- 「純粹資本主義論の方法」，『国士舘大学政経論叢』国士舘大学政経学会，平成 8 年第 3 号（通号第 97 号），pp.31-56，1996 年 9 月 25 日，（「純粹資本主義論の方法と効用」と改題し『価値論・方法論の諸問題』に収録）。
- 『価値論・方法論の諸問題』，御茶の水書房，1996 年 11 月 1 日。●
- 「宇野先生とはじめて会った日のこと」，『場』こぶし文庫，No.8，p.7，1996 年 12 月 20 日。▲

1997 年

- 「中小企業の論じ方」，『中小商工業研究』全商連付属・中小商工業研究所，第 50 号，pp.4-7，1997 年 1 月 1 日，（『現実経済論の諸問題』に収録）。
- 『増補 市場経済——歴史・思想・現在』（編書），名古屋大学出版会，1997 年 3 月 31 日。■
- 「はしがき」，山口重克編『増補 市場経済——歴史・思想・現在』名古屋大学出版会，pp.i-ii，1997 年 3 月 31 日。▲
- 「序論 市場経済と経済学」，山口重克編『増補 市場経済——歴史・思想・現在』名古屋大学出版会，pp.1-7，1997 年 3 月 31 日，（『価値論・方法論の諸問題』に収録）。
- 「第 I 編第 2 章 商業の時代」，山口重克編『増補 市場経済——歴史・思想・現在』名古屋大学出版会，pp.31-48，1997 年 3 月 31 日，（「商業の生成と世界展開」と改題し『現実経済論の諸問題』に収録）。
- 「巻頭のことば」，『流通』日本流通学会，第 10 号，pp.1-2，1997 年 9 月 30 日。▲
- 『アジアにおける工業化の諸問題——中国とインドネシアの繊維産業の調査を通して』〈国士舘大学政経学部創設 35 周年記念双書 第 2 巻（全 4 巻）〉（編書），国士舘大学政経学会，1997 年 11 月 4 日。■
- 「はしがき」，山口重克編・著『アジアにおける工業化の諸問題——中国とインドネシアの

繊維産業の調査を通して』〈国士舘大学政経学部創設 35 周年記念双書 第 2 巻（全 4 巻）〉国士舘大学政経学会, pp. iii-iv, 1997 年 11 月 4 日. ▲

「企業と市場の諸問題と中国」, 山口重克編・著『アジアにおける工業化の諸問題——中国とインドネシアの繊維産業の調査を通して』〈国士舘大学政経学部創設 35 周年記念双書 第 2 巻（全 4 巻）〉国士舘大学政経学会, pp. 71-97, 1997 年 11 月 4 日, (『現実経済論の諸問題』に収録).

「二十一世紀の武生郷友会像」, 『武生郷友会誌』武生郷友会, 第 105 号, pp. 101-103, 1997 年 12 月（発行日記載なし）. ▲

1998 年

「商業利潤論の方法——松尾秀雄の批評に答える」, 『東京経大会誌——経済学』東京経済大学経済学会, 第 207 号, pp. 115-127, 1998 年 1 月 21 日, (「松尾秀雄の問題提起とその検討」と改題し『商業資本論の諸問題』に収録).

「論文の書き方」, 『政経学部ゼミナール年報』国士舘大学政経学部, No. 18, pp. 1-3, 1998 年 3 月 20 日. ▲

「巻頭のことば」, 『流通』日本流通学会, 第 11 号, pp. 1-2, 1998 年 7 月 31 日. ▲

「商業資本の分化・独立の論理——福田豊の問題提起とその検討」, 『国士舘大学政経論叢』国士舘大学政経学会, 平成 10 年第 3 号（通号第 105 号）, pp. 1-48, 1998 年 9 月 25 日, (「福田豊の問題提起とその検討」と改題し『商業資本論の諸問題』に収録).

「今、日本の教育を考える（前編）」（座談会）, 『国士舘大学新聞』学校法人国士舘, 第 406 号, pp. 4-7, 1998 年 10 月 27 日. ▲

「市場経済は本来合成的な混合経済なのである」, 『現代の解説』現代の解説社, 第 5 号, pp. 8-12, 1998 年 10 月（発行日記載なし）, (『現実経済論の諸問題』に収録).

『商業資本論の諸問題』, 御茶の水書房, 1998 年 11 月 20 日. ●

「今、日本の教育を考える（後編）」（座談会）, 『国士舘大学新聞』学校法人国士舘, 第 407 号, pp. 1-3, 1998 年 11 月 27 日. ▲

1999 年

「巻頭のことば」, 『流通』日本流通学会, 第 12 号, pp. 1-2, 1999 年 9 月 10 日. ▲

「貨幣生成論にたいする批判の検討」, 『国士舘大学政経論叢』国士舘大学政経学会, 平成 11 年第 3 号（通号第 109 号）, pp. 79-124, 1999 年 9 月 25 日, (「マルクスの商品貨幣説に対する批判の検討」および「宇野弘蔵の商品貨幣説に対する批判の検討」と改題し『金融機構の理論の諸問題』に収録).

「近年の商品貨幣説批判の批判」, 『フジ・ビジネス・レビュー』富士短期大学経営研究所,

第 10 卷第 1 号 (通号第 18 号), pp.2-8, 1999 年 9 月 30 日, (「近年の商品貨幣説批判の概観」と改題し『金融機構の理論の諸問題』に収録).

「純粋資本主義における信用創造」, 『国士舘大学政経論叢』国士舘大学政経学会, 平成 11 年第 4 号 (通号第 110 号), pp.121-146, 1999 年 12 月 25 日, (『金融機構の理論の諸問題』に収録).

2000 年代

2000 年

「不換制下の信用創造」, 『国士舘大学政経論叢』国士舘大学政経学会, 平成 12 年第 1 号 (通号第 111 号), pp.17-44, 2000 年 3 月 25 日, (『金融機構の理論の諸問題』に収録).

「価値論論争と宇野理論——現代社会分析にとっての有用性」, 降旗節雄・伊藤誠共編『マルクス理論の再構築——宇野経済学をどう活かすか』社会評論社, pp.39-57, 2000 年 3 月 30 日. ▲

「中間理論としての類型論」, 『国士舘大学政経論叢』国士舘大学政経学会, 平成 12 年第 2 号 (通号第 112 号), pp.21-49, 2000 年 6 月 25 日, (『類型論の諸問題』に収録).

「純粋資本主義論における資本結合」, 『国士舘大学政経論叢』国士舘大学政経学会, 平成 12 年第 3 号 (通号第 113 号), pp.79-111, 2000 年 9 月 25 日, (『金融機構の理論の諸問題』に収録).

『金融機構の理論の諸問題』, 御茶の水書房, 2000 年 12 月 1 日. ●

「中間理論としての類型論 (2)」, 『国士舘大学政経論叢』国士舘大学政経学会, 平成 12 年第 4 号 (通号第 114 号), pp.1-33, 2000 年 12 月 25 日, (『類型論の諸問題』に収録).

2001 年

『現代の金融システム——理論と構造』, 東洋経済新報社, 2001 年 3 月 22 日, (小野英祐・吉田暁・佐々木隆雄・春田素夫との共著). ■

「はじめに」, 山口重克・小野英祐・吉田暁・佐々木隆雄・春田素夫著『現代の金融システム——理論と構造』東洋経済新報社, pp.iii-iv, 2001 年 3 月 22 日, (「筆者一同」とクレジット). ▲

「序章 金融論の体系と方法」, 山口重克・小野英祐・吉田暁・佐々木隆雄・春田素夫著『現代の金融システム——理論と構造』東洋経済新報社, pp.1-5, 2001 年 3 月 22 日.

▲

「第 1 章 金融システムの原理」, 山口重克・小野英祐・吉田暁・佐々木隆雄・春田素夫著

『現代の金融システム——理論と構造』東洋経済新報社, pp.7-40, 2001年3月22日,
〔第1章第1節 準備的考察——貨幣と資本〕は「近代日本の貨幣制度」と改題し
『現実経済論の諸問題』に収録). ▲

「外的諸条件の構造化と類型論の方法」, 『国士館大学政経論叢』国士館大学政経学会, 平
成13年第1号(通号第115号), pp.57-82, 2001年3月25日, (『類型論の諸問題』
に収録).

「アジアにおける市場経済の諸類型とその形成・発展に関する研究」, 平成9年度～平成
12年度科学研究費補助金(基盤研究B(1))研究成果報告書, 2001年4月(発行日
記載なし), (「華人ネットワーク」は『現実経済論の諸問題』に収録. 「はしがき」は
▲).

「華人経済論 序説」, 国士館大学政経学会編『21世紀の展望——政治・行政, 経済, 経
営』(国士館大学政経学部創設40周年記念論文集)国士館大学政経学会, pp.149-
170, 2001年7月25日, (「華人社会と華人企業」と改題し『現実経済論の諸問題』
に収録).

「華人ネットワーク論序説」, 『国士館大学政経論叢』国士館大学政経学会, 平成13年第
2・3号合併号(通号第116・117号), pp.27-52, 2001年9月25日, (「華人ネット
ワーク」と改題し『現実経済論の諸問題』に収録).

2002年

「分析用具としての原理論とその限界」, 『国士館大学政経論叢』国士館大学政経学会, 平
成14年第1号(通号第119号), pp.27-62, 2002年3月25日, (『類型論の諸問題』
に収録).

「『七つの資本主義』を読む(1)」(研究ノート), 『国士館大学政経論叢』国士館大学政経
学会, 平成14年第2号(通号第120号), pp.67-102, 2002年6月25日. ▲

「『七つの資本主義』を読む(2)」(研究ノート), 『国士館大学政経論叢』国士館大学政経
学会, 平成14年第3号(通号第121号), pp.163-196, 2002年9月25日. ▲

2003年

『東アジア市場経済——多様性と可能性』(編書), 御茶の水書房, 2003年2月28日. ■

「はしがき」, 山口重克編著『東アジア市場経済——多様性と可能性』御茶の水書房, pp.i
-vi, 2003年2月28日. ▲

「華人ネットワーク」, 山口重克編著『東アジア市場経済——多様性と可能性』御茶の水書
房, pp.111-148, 2003年2月28日, (『現実経済論の諸問題』に収録).

「『七つの資本主義』を読む(3)」(研究ノート), 『国士館大学政経論叢』国士館大学政経

- 学会, 平成 15 年第 1 号 (通号第 123 号), pp.97-128, 2003 年 3 月 25 日. ▲
- 「私の回顧論的傍観者風大学論」, 『政経学会報』 国士館大学政経学会, No.47, 頁数不明, 2003 年 3 月 (発行日不明). ▲
- 「『七つの資本主義』を読む (4)」 (研究ノート), 『国士館大学政経論叢』 国士館大学政経学会, 平成 15 年第 2 号 (通号第 124 号), pp.61-86, 2003 年 6 月 25 日. ▲
- 「現代社会と現代流通——分析視角・分析方法」, 『流通』 日本流通学会, 第 16 号, pp.6-13, 2003 年 8 月 29 日, (『現実経済論の諸問題』に収録).
- 「『七つの資本主義』を読む (5・完)」 (研究ノート), 『国士館大学政経論叢』 国士館大学政経学会, 平成 15 年第 3 号 (通号第 125 号), pp.151-191, 2003 年 9 月 25 日. ▲
- 「私の少年時代の非行と現代」, 『武生郷友会誌』 武生郷友会, 第 111 号, pp.27-31, 2003 年 10 月 (発行日記載なし). ▲
- 「経済学の現状および将来 (上)」, 『月刊情況』 情況出版, 第 3 期第 4 巻第 10 号, pp.34-51, 2003 年 11 月 1 日, (櫻井毅との対談). ▲
- 「経済学の現状および将来 (下)」, 『月刊情況』 情況出版, 第 3 期第 4 巻第 11 号, pp.19-35, 2003 年 12 月 1 日, (櫻井毅との対談). ▲

2004 年

- 「アメリカ型経営の特徴とメリット・ディメリット」, 『学会会報』 学士会, 第 845 号, pp.26-31, 2004 年 3 月 1 日, (『現実経済論の諸問題』に収録).
- 「多様な資本主義——段階論と類型論 (1)」, 『月刊情況』 情況出版, 第 3 期第 5 巻第 7 号, pp.184-187, 2004 年 7 月 7 日, (「歴史と理論の関連」と改題し『類型論の諸問題』に収録).
- 「銀行信用論ノート」, 『アソシエ 21 ニュースレター』 アソシエ 21, 第 65 号, pp.2-4, 2004 年 7 月 10 日. ▲
- 「村上和光著『景気循環論の構成』」 (書評), 『季刊 経済理論』 経済理論学会, 第 41 巻第 2 号, pp.99-101, 2004 年 7 月 20 日. ▲
- 「多様な資本主義——段階論と類型論 (2)」, 『月刊情況』 情況出版, 第 3 期第 5 巻第 9 号, pp.226-229, 2004 年 10 月 1 日, (「歴史と理論の関連」と改題し『類型論の諸問題』に収録).
- 『新版 市場経済——歴史・思想・現在』 (編書), 名古屋大学出版会, 2004 年 10 月 20 日.
■
- 「はしがき」, 山口重克編『新版 市場経済——歴史・思想・現在』 名古屋大学出版会, pp.i-ii, 2004 年 10 月 20 日. ▲
- 「序論 市場経済と経済学」, 山口重克編『新版 市場経済——歴史・思想・現在』 名古屋

- 大学出版会, pp.1-7, 2004年10月20日, (『価値論・方法論の諸問題』に収録).
- 「第I編第2章 商業の時代」, 山口重克編『新版 市場経済——歴史・思想・現在』名古屋大学出版会, pp.31-48, 2004年10月20日, (「商業の生成と世界展開」と改題し『現実経済論の諸問題』に収録).
- 「多様な資本主義——段階論と類型論(3)」, 『月刊情況』情況出版, 第3期第5巻第11号, pp.232-235, 2004年12月1日, (「歴史と理論の関連」と改題し『類型論の諸問題』に収録).

2005年

- 『ITによる流通変容の理論と現状』〈日本流通学会流通研究シリーズ〉, 御茶の水書房, 2005年4月20日, (福田豊・佐久間英俊との共編). ■
- 「はしがき」, 山口重克・福田豊・佐久間英俊編『ITによる流通変容の理論と現状』〈日本流通学会流通研究シリーズ〉御茶の水書房, pp.i-ii, 2005年4月20日, (「編者一同」とクレジット). ▲
- 「ITの進展による経済と社会の変容」, 山口重克・福田豊・佐久間英俊編『ITによる流通変容の理論と現状』〈日本流通学会流通研究シリーズ〉御茶の水書房, pp.3-21, 2005年4月20日, (『現実経済論の諸問題』に収録).
- 「資本主義市場経済の比較文化論的類型論」, 『月刊情況』情況出版, 第3期第6巻第5号, pp.190-222, 2005年6月1日, (『類型論の諸問題』に収録).

2006年

- 『類型論の諸問題』, 御茶の水書房, 2006年4月1日. ●
- 「「企業統治」と「所有と経営の分離」」, 『アソシエ21 ニュースレター』アソシエ21, 第88号, pp.2-4, 2006年5月10日, (『現実経済論の諸問題』に収録).
- 「電子マネーの貨幣論的考察」, 木立真直・辰馬信男編著『流通の理論・歴史・現状分析』〈中央大学企業研究所研究叢書26〉中央大学出版部, pp.21-49, 2006年8月10日, (『現実経済論の諸問題』に収録).
- “On the varieties of market economy” (Paper Prepared for the key-note speech in the International Forum on the Comparative Political Economy of Globalization held at Renmin University of China, Beijing, 2 September 2006), 2006年9月2日, (『現実経済論の諸問題』に収録).
- 「市場経済の多様性」(北京人民大学での2006年国際シンポジウムペーパーの日本語), 2006年9月2日, (『現実経済論の諸問題』に収録).
- 「中国とアメリカナイゼーション」, 『月刊情況』情況出版, 第3期第7巻第6号, pp.47-

50, 2006 年 12 月 1 日, (『現実経済論の諸問題』に収録).

2007 年

「社会主義市場経済の定義」, 『アソシエ 21 ニュースレター』アソシエ 21, 第 96 号, pp. 2-4, 2007 年 1 月 10 日, (『現実経済論の諸問題』に収録).

「清水真志著『商業資本論の射程 商業資本論の展開と市場機構論』(書評), 『経済学論集』東京大学経済学会, 第 73 巻第 1 号, pp. 69-73, 2007 年 4 月 1 日. ▲

『市场经济: 历史・思想・现在』(社科文献精品译库)(編書), 社会科学文献出版社, 2007 年 5 月(発行日記載なし). ■

「中文版序」, 山口重克主编『市场经济: 历史・思想・现在』(社科文献精品译库), 社会科学文献出版社, pp. 1-2, 2007 年 5 月(発行日記載なし). ▲

「前言」, 山口重克主编『市场经济: 历史・思想・现在』(社科文献精品译库), 社会科学文献出版社, pp. 1-2, 2007 年 5 月(発行日記載なし). ▲

「绪论 市场经济与经济学」, 山口重克主编『市场经济: 历史・思想・现在』(社科文献精品译库), 社会科学文献出版社, pp. 1-6, 2007 年 5 月(発行日記載なし). ▲

「第二章 商业时代」, 山口重克主编『市场经济: 历史・思想・现在』(社科文献精品译库), 社会科学文献出版社, pp. 26-42, 2007 年 5 月(発行日記載なし). ▲

2008 年

「宇野没後 30 年研究集会での議論に思う」, 『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』, 第 1 期第 4 号, pp. 1-2, 2008 年 1 月 18 日. ▲

「宇野弘蔵著/櫻井毅解説『資本論』と私」(書評), 『週刊読書人』読書人, 第 2728 号, p. 4, 2008 年 3 月 7 日. ▲

「宇野理論と制度派経済学」, 『アソシエ 21 ニュースレター』アソシエ 21, 第 119 号, pp. 2-4, 2008 年 11 月 10 日, (『現実経済論の諸問題』に収録).

『現実経済論の諸問題』, 御茶の水書房, 2008 年 12 月 25 日. ●

2009 年

「財政健全化志向のいびつさ」, 『全たばこ新聞』全日本たばこ産業労働組合, 第 1053 号(通巻 2747 号), p. 2, 2009 年 9 月 5 日. ▲

2010年代

2010年

- 「『宇野理論の現在と論点』の刊行について」, 『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』, 第1期第12号, pp.1-2, 2010年4月30日, (桜井毅・柴垣和夫・伊藤誠との共同クレジット). ▲
- 『宇野理論の現在と論点——マルクス経済学の展開』, 社会評論社, 2010年7月30日, (桜井毅・柴垣和夫・伊藤誠との共編著). ■
- 「はじめに」, 桜井毅・山口重克・柴垣和夫・伊藤誠編著『宇野理論の現在と論点——マルクス経済学の展開』社会評論社, pp.9-20, 2010年7月30日, (桜井毅・柴垣和夫・伊藤誠との共同クレジット). ▲
- 「小幡道昭の宇野理論批判」, 桜井毅・山口重克・柴垣和夫・伊藤誠編著『宇野理論の現在と論点——マルクス経済学の展開』社会評論社, pp.145-159, 2010年7月30日. ▲
- 「宇野弘蔵の「過渡期」説について」, 『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』, 第2期第2号(通巻第15号), pp.1-7, 2010年11月24日. ▲
- 「マルクス経済学と現代」, 『武生郷友会誌』武生郷友会, 第118号, pp.39-51, 2010年11月(発行日記載なし). ▲

2011年

- 「マルクス経済学の市場経済観と現代の市場経済」, 菅原陽心編著『中国社会主义市場経済の現在——中国における市場経済化の進展に関する理論的実証的分析』御茶の水書房, pp.91-116, 2011年2月10日. ▲
- 「伊藤君のこと」, 『伊藤誠著作集 第2巻——価値と資本の理論』社会評論社, 伊藤誠著作集によせてNO2, pp.1-4, 2011年4月20日. ▲

2012年

- 「『マルクス経済学の市場経済観と現代の市場経済』解説」, 『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』, 第2期第7号(通巻第19号), pp.1-10, 2012年3月31日. ▲
- 「岩田さんの人と学問」, 岩田弘先生を偲ぶ会編『岩田弘 経済学と革命運動』情況出版, pp.38-40, 2012年4月(発行日記載なし), (五味久壽編『岩田弘遺稿集——追悼の意を込めて』批評社, 2015年12月10日に収録). ▲

2013年

- 「現代市場経済分析と『資本論』」, 『月刊情況』情況出版, 第4期第2巻第3号, pp.131-

172, 2013 年 6 月 1 日. ▲

「小幡道昭による山口批判へのリプライ」, 『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』, 第 2 期第 10 号 (通巻第 22 号), pp.1-28, 2013 年 6 月 4 日, (「資本主義の不純化と多様化——小幡道昭の批評に答える」と改題し『季刊 経済理論』経済理論学会, 第 50 巻第 2 号, 2013 年 7 月 20 日に収録). ▲

「資本主義の不純化と多様化——小幡道昭の批評に答える」, 『季刊 経済理論』経済理論学会, 第 50 巻第 2 号, pp.56-68, 2013 年 7 月 20 日. ▲

2014 年

「日本流通学会の歩みの回顧と展望」, 『流通』日本流通学会, 第 34 号, pp.64-75, 2014 年 7 月 10 日. ▲

「マルクス恐慌理論の全体像と今日的有効性」, 『季刊 経済理論』経済理論学会, 第 51 巻第 3 号, pp.44-53, 2014 年 10 月 20 日. ▲

2017 年

「資本主義の歴史的・地域的類型の変容とグローバリゼーションからローカリゼーションへの循環的交替」, 『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』, 第 2 期第 18 号 (通巻第 30 号), pp.1-11, 2017 年 2 月 13 日. ▲

2020 年代

2022 年

“A Systematic Approach to Marxian Credit Theory Based on Uno Theory,” *Japanese Discourses on the Marxian Theory of Finance*, Edited by Kei Ehara, Palgrave Macmillan, pp.111-133, 2022 年 2 月 3 日. ▲

注 —————

* 本研究は、2022 年度の東京経済大学個人研究助成費 (研究番号 22-08) を受けた研究成果である。

** 本目録の作成にあたって、山口重克・逸子ご夫妻、蔭川亮太氏、清原文氏、桜井毅氏、菅原陽心氏、鈴木和雄氏に大変お世話になった。ここに記して感謝を申し上げる。

山口重克 年譜

- 1932年 7月 福井県越前市（旧今立郡北日野村）に生まれる（27日）.
1942年 5月まで三重県四日市市にて生活する.
- 1942年 5月 福井県越前市（旧今立郡北日野村畑）に転居する.
- 1945年 3月 北日野小学校を卒業.
4月 旧制武生中学校に入学.
- 1948年 3月 武生高等学校併設中学校を卒業.
4月 武生高等学校に進学.
- 1951年 3月 同上を卒業.
4月 東京大学教養学部文科一類に入学.
- 1955年 3月 東京大学経済学部経済学科を卒業.
4月 東京大学大学院社会科学研究所 理論経済学・経済史学専門課程修士課程に入学.
- 1959年 3月 同上修了（経済学修士）.
4月 同上博士課程に入学.
- 1962年 6月 同上単位取得退学.
電気通信大学経営工学教室助手となる.
- 1965年 4月 新潟大学商業短期大学部講師となる.
- 1966年 7月 同上 助教授.
- 1968年 4月 法政大学経済学部助教授，金融論担当となる.
9月 「商業資本の研究」により経済学博士（東京大学）の学位を取得.
- 1972年 4月 法政大学経済学部教授，経済原論担当となる.
- 1974年 4月 東京大学経済学部助教授，経済理論 AI 担当となる.
- 1977年 7月 同上 教授.
- 1983年 2月 『競争と商業資本』（岩波書店）.
9月 『資本論の読み方——宇野弘蔵に学ぶ』（有斐閣）.
- 1984年 2月 『金融機構の理論』（東京大学出版会）.
- 1985年 12月 『経済原論講義』（東京大学出版会）.
- 1987年 11月 『価値論の射程』（東京大学出版会）.
- 1992年 7月 『経済学・人間・社会』（時潮社）.
- 1993年 3月 定年により東京大学を退職する.
4月 東京大学名誉教授，国土舘大学政経学部教授となる.

- 1996 年 11 月 『価値論・方法論の諸問題』（御茶の水書房）.
1998 年 11 月 『商業資本論の諸問題』（御茶の水書房）.
2000 年 12 月 『金融機構の理論の諸問題』（御茶の水書房）.
2003 年 3 月 国士舘大学を退職する.
2006 年 4 月 『類型論の諸問題』（御茶の水書房）.
2008 年 12 月 『現実経済論の諸問題』（御茶の水書房）.
2021 年 9 月 死去（11 日）.

解説

山口重克は1932年生まれの日本のマルクス経済学者であり、宇野弘蔵の研究以降に形成された宇野学派の代表的な研究者である。1960年代より発表されたその研究は、商業資本論や信用論といった原理論の理論領域からはじまり、次第に原理論の全領域をおおうかたちで主著『経済原論講義』（東京大学出版会、1985年12月）に結晶していった。後年には、ブラック・ボックス論に象徴される経済学の新たな方法論の提起、また山口・小幡論争をつうじて彫琢されていった資本主義の類型論の提示、そして中国経済をはじめとする現代的現象の考察といった、原理論・段階論・現状分析の経済学のフィールド全体を包括する研究をおこなった。

山口の一連の研究のインパクトは研究者間においてきわめて大きい。とくに1985年に上梓された『経済原論講義』は、宇野弘蔵以降の原理論研究の集大成となる記念碑的著作であるといつてよい。宇野以降の原理論研究はすべてこの『経済原論講義』に流れ込み、これ以降の原理論研究はすべて『経済原論講義』から流れ出したといつてもけしていいすぎではなからう。主著『経済原論講義』をはじめとする山口の一連の研究は、いまなお学派を問わず、マルクス経済学研究における枢要な参照軸のひとつでありつづけている。ただ惜しむらくは、英文をはじめ外国語で発表されたものや翻訳されたものがほとんどないため、海外において山口の研究はまったくといつてよいほど知られていない。もっとも近年、江原慶や柴崎慎也らが山口の原理論の白眉といえる商業資本論や信用論、資本市場論の研究を英文等で海外に紹介しており¹⁾、徐々に山口理論の日本の国外への輸出がなされてきている。

ここでは「解説」と銘打ったが、山口の著作は単著11冊をはじめ相当な数にのぼるため、そのすべてを解説することはここではできない。また、その著作の多くがこれまでも多くの研究者によって議論の俎上にすでにあげられていることに鑑みるに、すべての著作にここで解説をくわえる必要性はうすいといえる。したがって、この「解説」においては、管見ではこれまでほとんど取り上げられていない単著未収録の著作を主として、簡単な解説をくわえていくこととする。

【1960年代の著作】

山口が自身の論文のなかでも最高傑作と認めていた最初の論文「商業信用と銀行信用——信用貨幣流通の意義と限界」（鈴木鴻一郎編『信用論研究』法政大学出版局、1961年12月）を皮切りに、1960年代の研究は、信用論・貨幣論、そして「商業資本の研究」（博士学位論文、1968年9月）としてまとめられる商業資本論の領域を中心にすすめられている。

こうした研究のなかにあつて「『マルクス主義発生の歴史的背景』（林健太郎）批判」（『社

会主義』社会主義協会, 第 155 号, 1964 年 9 月) は異質の論稿である。この論稿では、マルクス批判家の林健太郎の論文にたいする徹底した批判がなされている。他の山口の著作に照らしても、これほど強い論調で批判したものはあまり見当たらない。林によるマルクス主義批判はここで取り上げないが、この論稿で山口は、マルクス主義にも多様な側面があるため、それを批判するのであれば「どの側面、どの分野の、どの次元の問題を「批判」しているのかをあらかじめはっきりさせておく必要がある」(53-54 頁) こと、また、マルクス主義の本質は「科学」であるため、「マルクス個人の言説の中に非「科学」的なものがあるとすれば、それはもちろん検討され、限定されなければならない」(52 頁) ことを主張している。ここには宇野弘蔵による科学とイデオロギーを分離する視角が色濃く反映していよう。山口にとって、林がなすようなマルクス主義にたいする一般的・素朴な批判は、宇野以降の高い研究水準にあるマルクス経済学にはおよそあてはまらないのである。

「『大国日本』の後進性」(『新潟県教育月報』新潟県教育庁企画行政課, 第 18 巻第 11 号, 1968 年 2 月) は、山口によるいわば文明批判である。国民総生産が世界第三位になったことをもって日本大国論を展開する保守にたいして、革新は一人あたり国民所得の低さをもって日本後進国論をとなえていた。こうした革新の議論にたいして、真の意味での後進性の問題点のひとつとして山口は、所得格差、つまり分配の不均衡に言及する。またさらに根本的な後進性の問題として「物による人間の支配」(40 頁) があるとされる。ここではその例として、貨物線の踏切で長時間多くの人々が「まるで大名行列に土下座させられているように」(39 頁) 待つ姿が示される一方、他方では大気汚染などの「公害問題」があげられている。山口は小学校 4 年のときまで三重県四日市市で約 10 年間生活していたが、公害問題についてはとくに思うところがあったのであろう。

書評「岡橋保編『金融論体系』」(『週刊金融財政事情』金融財政事情研究会, 第 939 号, 1969 年 5 月) は、全 1 ページとあまりにも短い書評であるが、宇野学派の論者らが当時ほとんど言及することのなかった不換銀行券論争を取り上げている点に特徴がある。書評は各章にたいして簡単にコメントをするにとどまるものであり、この書評の限りでは岡橋保の不換銀行券＝信用貨幣説などがどのように評価されているのかは判断できない。この点については、山口の最初の論文「商業信用と銀行信用——信用貨幣流通の意義と限界」のいくつかの註が参考になろう。この論文における註のいくつかは、『金融機構の理論』(東京大学出版会, 1984 年 2 月) に収録される際に削除されているが、岡橋などの先行研究に言及している点においては重要であり、一読の意義は十分にある。マルクス経済学における信用論・貨幣論の研究史を確認するうえでも有用であらう。

【1970 年代の著作】

書評「後藤泰二著 株式会社の経済理論」(『日本読書新聞』日本出版協会, 第 1583 号,

1971年2月)では、株式会社論ないし資本結合論の原理的考察が先駆的になされている。宇野学派の原理論において株式会社は、宇野がこれを原理論では説きえないとしたことの影響から正面切って論じられることは当時ほとんどなかった。これにたいして、金融論の川合一郎や批判経営学の馬場克三は、それぞれ「他人資本の自己資本化」論と「自己資本の他人資本化」論をとえながら株式会社の理論化を模索していた。後藤泰二の著作は、馬場の「自己資本の他人資本化」論の継承・発展を図るものである。『経済原論講義』にいたる研究において山口は、宇野学派において先駆的に資本結合論ないし資本市場論の理論化を図ることになるが、その際念頭にあったのは疑いなく川合と馬場・後藤らの株式会社論争であり、その論争をいわば止揚する理論化であった。この点からみると、『経済原論講義』で展開される資本市場論は、馬場による株式会社導出の方法論である発生論と川合の「他人資本の自己資本化」論との理論的統合と捉えることができる²⁾。

『資本論』の諸問題(鈴木鴻一郎編『マルクス経済学講義』青林書院新社、1972年9月)では、主として宇野学派の立場からの『資本論』の検討がなされている。「1 実体と形態」、「2 資本一般と諸資本の競争」、「3 歴史と論理」が論じられているが、このうち1と3は基本的には宇野による『資本論』批判の再論である。のこる2は、山口原論における最重要概念ともいえる「競争」を扱っている点で重要なものといえよう。ここで詳述は避けるが、山口は『資本論』を、マルクスの経済学批判体系のプランのうち「資本一般」のみが論じられているとする解釈ではなく、「競争」など「資本一般」を超えた領域も射程に含まれているとする解釈に立っている。のちに山口が使う用語でいえば、「資本一般説的観点」ではなく「競争論的観点」からの原理論の再構成の必要がここで示されているのである³⁾。

書評「鎌倉孝夫『経済学方法論序説』」(『経済学論集』東京大学経済学会、第40巻第4号、1975年1月)では、鎌倉の説をまとめたうえで、「それ自身に利子を生むものとしての資本」の問題と、原理論と段階論との関連についての2点が論じられている。とくに、前者については詳述されているわけではないが、山口が鎌倉説をつうじて示そうとしている点はおそらく、鈴木鴻一郎や岩田弘の世界資本主義論による株式資本論の原理論における展開の方向性と、宇野・日高普の純粋資本主義論による株式資本の原理的非展開の方向性のどちらにも回収されない、独自の純粋資本主義論による株式資本論の原理的展開の必要性であろう。この山口の原理論構築の方向性は、現在では多くの賛同を得ているが、当時の宇野学派内においてはやはり異端である。

この株式資本論については、「7-1 信用と利子」(大内秀明・鎌倉孝夫編『経済原論』有斐閣、1976年11月)においてもくり返し論じられている。ここでは産業資本間の商業信用から銀行信用が体系的に展開されたのち、註ではあるが、長期資金にたいする調達動機から資本結合が論じられている。ここで注目すべきは、「資本市場は原理論では展開できないとする考え方がこれまでのところ有力であるが、産業資本の遊休貨幣資本は貨幣市場だけにな

く資本市場にも出動しうる性格をもっており、そのかぎりでは資本市場にも原理的規定が与えられる一面がある」(194頁)との一文であろう。信用機構の限界から資本市場を導出する『経済原論講義』の構成はここですでに与えられている。

「編集後記」(『社会科学のために』時潮社、第2号、1977年1月)について。『社会科学のために』は、日高普を編集責任者として1976年春に創刊された雑誌であり、第3号(1977年6月)までつづいた。創刊号には宇野弘蔵のおそらく絶筆となる『「資本論」と私』が収録されているほか、鈴木鴻一郎「宇野博士誕生」などユニークな文章がこの雑誌には多く収録されている。創刊号の日高普の編集後記によれば、山口はこの雑誌に、桜井毅、春田素夫とともに編集協力として参加しているようである。

「第三巻「資本主義的生産の総過程」の対象と課題——第三巻と第一巻・第二巻との関係」(佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄・山口重克編『資本論を学ぶIV』有斐閣、1977年8月)では、すでに述べたように、マルクスの経済学批判体系のプランをつうじて「資本一般説的観点」と「競争論的観点」が詳述され、宇野の原理論においても「競争論的観点」が徹底されていないことが指摘されている。

「宇野理論の成果と今後の課題 第一部＝原理論(討論)」(『経済学批判 臨時増刊』社会評論社、1977年9月)は、宇野弘蔵が死去した直後になされた宇野学派における原理論をめぐる討論の記録である。参加者は日高普、馬渡尚憲、春田素夫、鎌倉孝夫、桜井毅、山口であり、山口の報告をふまえた討論がなされている。この討論は、宇野理論の成果を集約するという意味で重要な側面をもつことにくわえ、宇野理論について通説の座を占めることになる山口理論の形成をみるうえでも重要な意義を有している。この討論では論点は多岐にわたっているが、『経済原論講義』として結実する山口理論の観点から振り返ると、①分析基準としての原理論の提起、②流通論の独立化の意義の再考、③機構論的観点による利子論の再構成、④原理論の終結規定としての景気循環論の位置づけ、⑤「資本の流過程」論の再考があげられよう。ここでは①のみ言及するにとどめておく。山口は原理論に2つの役割をみている。ひとつは「資本主義の歴史性の証明、あるいは唯物史観の論証」(24頁)であり、のちの用語では「本質規定としての原理論」である。またひとつは、「現状分析の基準」(同上)であり、のちに「分析基準としての原理論」として規定される役割である。このうち山口は後者を宇野学派に独自の原理論の役割であるとすることによって、この「分析基準としての原理論」という視角から原理論全体の再構成をおこなっていくこととなる。上記②～⑤についても、基本的には「分析基準としての原理論」を構築するという目的からなされているのである⁴⁾。

【1980年代の著作】

1980年代は山口のこれまでの論文が単著としてまとめられ、たてつづけに出版された時

期にあたる。『競争と商業資本』（岩波書店，1983年2月）にはじまり、『資本論の読み方』（有斐閣，1983年9月），『金融機構の理論』（東京大学出版会，1984年2月），『経済原論講義』（東京大学出版会，1985年12月），『価値論の射程』（東京大学出版会，1987年11月）にいたって，山口の原理論は到達点を迎えたといえよう。

「戦後日本の『資本論』研究と宇野理論（討論）」（佐伯尚美・佐美光彦・石川経夫編『マルクス経済学の現代的課題』東京大学出版会，1981年1月）は，その一部のみが単著に収録されているにとどまるうえ，上記の「宇野理論の成果と今後の課題 第一部＝原理論（討論）」とならんで重要な発言がなされているため取り上げておく。この討論では，上記の討論においても提起されていた，分析基準としての原理論や流通論独立化の独自の意義，機構論的観点による利子論の再構成といった視角がより明確に打ち出されているほか，分化・発生論として定式化される原理論構築上の方法の必要性が述べられている。どの論点もとくに重要なものであり，直接この討論の記録を読んでもらいたいが，この討論のハイライトは，分析基準としての原理論を強く打ち出す山口と，それにたいする大内力の総括にある。大内はいう。「山口君の議論は，原理論は積極的な分析基準だというふうに，少し強くいいすぎた，そのために僕からいわせれば，第一の潮流の教条主義に近くなってしまったのではないかな（笑い）」（51頁）。これを受け山口はいう。「宇野先生の消極的な言い方から一步踏み出してみなかったわけですが，今の総括で結局，大山は鳴動もしないで元に戻っちゃったという感じでありますけれども（笑い）」（同上）。両者ともに「笑い」で終わっているが，ここには山口理論以前・以後という決定的な分岐がみとれる。討論のかたちで記録されたこの研究史における分岐は，宇野理論という大山を鳴動させる山口理論という新たな大山の隆起を知らせるものであり，のちの研究が示すように，この討論を経た1980年代半ば以降の原理論研究は山口理論を焦点とする方向へシフトしていったのである。

「金融機構の原理」（志村嘉一・山口重克・小野英祐・佐々木隆雄・春田素夫著『現代金融の理論と構造』東洋経済新報社，1983年5月）は，「金融の原理的機構」（小野英祐・志村嘉一・玉野井昌夫・春田素夫・山口重克著『現代金融の理論』時潮社，1971年11月）の改訂版である。商業信用，銀行信用，資本市場の展開に関して基本的には大きな変更はないが，銀行の信用供与の形態，銀行手形および銀行券の論じ方などに多少の相違がある。また，この1983年論稿の再改定版にあたる単著未収録の論稿「金融システムの原理」（山口重克・小野英祐・吉田暁・佐々木隆雄・春田素夫著『現代の金融システム——理論と構造』東洋経済新報社，2001年3月）をみても，金融論の論じ方に大きな変更は見当たらない。筆者がみる限り，山口の信用論および資本市場論は，上記の1971年論稿もしくは論稿「総過程論」（『NHK 大学講座 経済学2』日本放送協会，1973年1月）の時点でほぼ固まっているといえてよい。

「利子論の課題」（伊藤誠・桜井毅・山口重克編『利子論の新展開』社会評論社，1984年3

月)について。この論稿では、宇野における信用論の再構成がどのような経緯でなされているのか、1936年の「講義プリント「経済原論」(『宇野弘蔵著作集 別巻』岩波書店、1974年8月)にまでさかのぼって学史的に明らかにされている。これをつうじて、残された課題として、利子論における機構論的観点および分化・発生論の不徹底があげられていることにくわえ、「物神性論をどのように扱うべきか」(16頁)という問題が提起されている。この点、『経済原論講義』では分析基準としての原理論という視角から機構論的観点を徹底するため、宇野『原論』と異なり利子論から物神性論的観点が排除されている一方、かわって流通論に物神性の議論が送り込まれる構成になっている。

「4 資本と資本家」(『経済評論』日本評論社、復刊第33巻第10号、1984年10月)は、論文「経済的諸関係と行動主体」の末節に書かれた単著未収録の著作である。この論文は川合一郎の方法論、行動論アプローチと行く先論アプローチを検討するものであるが、第4節は行動論の観点から株式会社論の検討がなされている。山口は、理論的な抽象度を高めるためであろう、原理論を議論する場では株式会社や株式市場ではなく結合資本や資本市場という用語を基本的に使用しているが、この論稿ではめずらしく株式会社が対象とされている。現代の株式会社の問題として、株主の分散化、零細化、法人株主の問題など他の論稿ではほとんど論じられていない内容が含まれている。

【1990年代の著作】

90年代はソ連崩壊もあって、マルクス経済学をめぐる一般雑誌や新聞のインタビューを山口はいくつか受けている。「マルクスは死んだのか——「マル経」学者七人を直撃する」(『文藝春秋』文藝春秋、第68巻第2号、1990年2月)は、山口のほか、伊藤誠、大内秀明、高橋正雄、鶴田満彦、富塚文太郎、降旗節雄にたいするインタビューであり、社会主義の崩壊をマルクス経済学者はどのように考えているのかなどが焦点とされている。「経済学部唯野教授」(『AERA』朝日新聞社、第3巻第32号、1990年8月)は、マルクス経済学の有効性を問うものであり、「マル経学者 受難の時代」(『日本経済新聞』日本経済新聞社、1991年3月18日)もまた同様の記事である。科学とイデオロギーの分離を当然とする宇野学派にとって、ソ連などの社会主義の崩壊が即座にマルクス経済学の非有効性につながるはずはないが、東京大学をはじめ多くの大学においてこれ以降、マルクス経済学のポストが激減したことは事実である。だが、学問的な正しさは大学のポストの数で決まるわけではなかろう。現在、筆者もそうであるが、マルクス経済学を攻めんと志す研究者の多くは社会主義圏崩壊後に研究に踏み入った研究者である。マルクス経済学の有効性は、歴史的な社会主義の文脈からいったん切り離されたいま、真の「社会科学」という意味において試されているといえよう。

「廣松とのこと」(『廣松渉著作集 第12巻』岩波書店、月報4、1996年9月)は、『廣松

解説

『渉著作集』の月報に書かれたエッセイである。1960年頃、中野正をつうじて最初に廣松に会ったことや大学院ゼミでの廣松の姿、ともに東大の教員になったあとの2度の合同ゼミなど、山口からみた廣松の当時の思い出がつつられている。エッセイの末尾では山口の原論にたいする廣松の影響が述べられている。山口の流通論および競争論は、個別の経済主体の行動を追跡する、いわゆる行動論アプローチをつうじて描かれるが、これは同時に個別経済主体の意図せざる結果としての社会的結果を明らかにすることにつながっている。つまり、個別の行動と社会的結果という二分法的構成によって流通論・競争論は構成されるのである。こうした二分法的構成を「廣松の当事者・観察者という二分法を重ね合わせることによって、自分の考えていたことの意味が明確になった」（6頁）と山口は述べている。「大いに自信を得た思いがした」（同上）とも述べているように、廣松との出会いは、山口の原理論に哲学的な裏付けを与えることになったといえよう。

「宇野先生とはじめて会った日のこと」（『場』こぶし文庫、No.8、1996年12月）には、タイトルどおり、大学院4年の頃、質問をするために訪ねた研究室での宇野との出会いがつつられている。「私は今でも、あの日先生の研究室を辞去したあと、大学の構内をとびはねるようにして帰って来たことを鮮明におぼえている」（7頁）と。筆者もまた山口がそうであったように、山口とはじめて会った研究会終了後、とびはねるようにして自宅へ帰ったことを鮮明におぼえている。

「論文の書き方」（『政経学部ゼミナール年報』国士舘大学政経学部、No.18、1998年3月）は、3ページあまりの大学生に向けて書かれた文章である。論文の主題の設定の仕方や構成の方法、実際に書く際の注意点や推敲についてなど、大学生に向けたものとはいえ、一級の経済学者による論文作成についての説明は有益かつ単純に面白い。筆者は『経済原論講義』にみられる山口の文章、ある人からいわせれば無味乾燥で面白くないその文章に、むしろ一切の無駄を排除した禁欲的な理論家の姿をみるが、そうした文章の書き方は40代の終わりごろに山口が経験した海外生活によるものであることはこのエッセイで知った。また、起承転結の4文法の例として山口が気に入っているものとして、「大阪本町糸屋の娘／姉は18、妹は16／諸国大名は弓矢で殺す／糸屋の娘は目で殺す」が紹介されていたり、山口がある時期よく使った論文構成の型が示されているなど、この文章が単著未収録で容易に読むことができないことが悔やまれる。

【2000年代の著作】

「価値論論争と宇野理論——現代社会分析にとっての有用性」（降旗節雄・伊藤誠共編『マルクス理論の再構築』社会評論社、2000年3月）では、マルクス価値論、宇野の流通形態論および労働価値説の論証が説明・検討されたうえで、すでに『経済原論講義』で大方披歴されている山口の労働価値説の論証と個別的価値の概念規定が示されている。これらの点は、

単著未収録の著作「価値概念の拡張の必要について」(『現代の解説』現代の解説社, 第 4 号, 1990 年 9 月)にも同様の内容が書かれてある。山口の流通論での価値規定については、『経済原論講義』以降重要な変更がみられる。『経済原論講義』では、「個別的価値」とは別に「社会的価値」が貨幣論で規定されていたが、論文「価値概念の広義化再論——降旗節雄氏の反論に答える」(『月刊 状況と主体』谷沢書房, 第 187 号, 1991 年 6 月)において降旗の批評にこたえるなかで「社会的価値」を原理論から撤収するにいたっている。論文「価値論論争と宇野理論」において、「私としては、労働価値説と効用価値説とは二者択一的な議論ではなく、相互補完的關係にある理論であるとみたい」(55 頁)と述べる背後にはこうした重要な変更があったのである。

「私の回顧論的傍観者風大学論」(『政経学会報』国士舘大学政経学会, No. 47, 2003 年 3 月)は、国士舘大学を退職する際の最終講演の原稿である。筆者はこれが掲載された『政経学会報』No. 47 については入手できていない。この文章(表題含め)の存在自体は山口本人から知らされており、国士舘大学図書館をはじめ各方面にレファレンスをかけてみたものの発見にいたらなかった。山口が亡くなったのち、奥様である逸子氏に問い合わせることによって、実際の講演で使用したと思われる元原稿が発見された。この元原稿は A4 で 8 ページの文章であり、「前置き」、「II. 研究者のいくつかのタイプ」、「III. 大学論・教育論」から構成されている。発表原稿であるためか、「前置き」に書かれた年代ごとの回顧について、また最終ページについては箇条書きの文章が並べられている。内容は、「前置き」では大学入学後からの研究生活が回顧され、1 ページほどの II では、宇野による研究者の 4 タイプの紹介とオリジナリティについて書かれている。同じく 1 ページほどの III には、大学教員について、社会の変化についてなど雑多な内容が述べられている。どのように山口が研究をすすめてきたのかなど重要な証言も含まれていることから、また初出稿が発見できていないということからも、この元原稿は貴重なものであるといえよう。

「私の少年時代の非行と現代」(『武生郷友会誌』武生郷友会, 第 111 号, 2003 年 10 月)は、上記の「私の回顧論的傍観者風大学論」が大学入学以降の回顧であったことにたいして、生まれてから高校までの生活が回顧されている。さまざまな媒体に書かれた山口のプロフィールには福井県武生市生まれとあるが、これは出生が母親の実家であることを示したもので、実際に山口が武生で生活したのは、小学校 4 年生のときから高校卒業までの約 9 年間である。小学校 4 年生までは、父親が三重県の四日市商業の教員であったことから四日市市で生活し、小学校 4 年生になったばかりの春に父親の郷里の今立郡北日野村畑に引っ越したとある。この文章には幼少期のことがさまざまにつづってあるが、やはり意外なことは、タイトルにもあるように、山口が「中学校 2 年生頃から高校にかけていわゆる不良生徒」(30 頁)であったことであろう。山口本人からも直接、もともと自分が不良生徒であったということを筆者は聞いたことがあった。不良生徒が必ずしも鈍才ではないであろうが、しばしば引き合いに

解説

出される宇野による研究者の4類型、「都会の秀才、都会の鈍才、田舎の秀才、田舎の鈍才」のうち、田舎育ちの不良生徒であった山口は最も宇野が高く評価した「田舎の鈍才」に近いといえよう。もちろん山口本人は自ら「田舎の鈍才」を自称しないであろうが、岡山県倉敷市の「田舎」生まれで、優等生にたいするコンプレックスを中学生ころから抱えていた「鈍才」の宇野と同様であったことは、ひそかな自信につながったのではないだろうか。

「経済学の現状および将来（上・下）」（『月刊情況』情況出版、第3期第4巻第10号・第11号、2003年11月・12月）は盟友、櫻井毅との対談である。主にブラック・ボックス論に代表される方法論、原理論と段階論のもつ意味やそれらの関連など、経済学のパラダイムにかかわる議論がくりひろげられている。内容はプロ向けであり、方法論について再考をする際には参照されるべき対談である。

「銀行信用論ノート」（『アソシエ21 ニュースレター』アソシエ21、第65号、2004年7月）は、斉藤美彦「銀行業における信用リスクと流動性リスク」（『武蔵大学論集』武蔵大学経済学会、第50巻第3号、2003年2月）にたいする反論・疑問が書かれた3ページほどの文章である。問題の焦点は、銀行による信用供与の方法として、銀行手形など銀行による自己宛債務証書による供与と当座預金設定による信用供与のいずれの方法を原理論では重視するかである。問題がこれだけであれば筆者はそれほど重要な問題とは思わないが、斉藤が現代の金融システムをふまえて「預金」というものを原理的にどのように扱うのかを問題としている点は、基本的に金本位制下の金融システムを念頭に理論を構築している山口の金融機構論を再考するうえでひとつの焦点となろう。つまり、吉田暁をはじめとしてとなえられている内生的貨幣供給論を宇野学派はどのように受け止めるべきかがここでの議論の真の焦点である。山口は反論をつうじてとくに変更すべき点はないと考えているようであるが、金廃貨から随分ときを経た現在において、貨幣論を含め山口の金融機構論が再考にふされる時期がきていることは否定しえないであろう。ともあれ、この論稿は非常に短く、また単著未収録で参照が不便であるが、『経済原論講義』および『金融機構の理論の諸問題』（2000年）以降の山口の銀行にたいする理解が示されている点で必読といえよう。

書評「村上和光著『景気循環論の構成』」（『季刊 経済理論』経済理論学会、第41巻第2号、2004年7月）は、1995年の廣松書評から約10年ぶりに書かれた書評である。ここでははじめに内容の要約がなされたうえで、疑問点として、「(1) 景気循環と価値法則との関係」、「(2) 信用創造論に関連するいくつかの問題」、「(3) 株式資本をめぐる方法論の問題」が提出され、最後に本書の貢献が述べられている。それぞれの疑問点には評者である山口の自説が述べられており、各分野の研究上、適宜参照されるべきものである。

書評「清水真志著『商業資本論の射程 商業資本論の展開と市場機構論』」（『経済学論集』東京大学経済学会、第73巻第1号、2007年4月）は、宇野学派の若手研究者による商業資本論を対象とする著書への書評である。日本の商業資本論研究は、宇野を第1期とすれば、

山口が第 2 期の代表的研究者となる。そして近年、第 3 期と目される「組織化」をキーワードとする研究が現れてきている。代表的な論者は、福田豊、田中英明であり、清水真志もまたこの潮流をさらに強力に推し進めた代表的論者といえる。清水の著書の内容は、商業資本論に限らず、信用論や資本市場論をも対象とするひろい射程をもっているが、山口にとっては、当然無視しえない研究であったことは想像に難くない。本書評ははじめに要約が簡単にふされたのち、清水にたいする反論・疑問が複数提出されている。ここには第 2 期と第 3 期の理論的相違点が明確に現れており、山口の商業資本論が第 3 期によってどのように再構成されようとしているのかが山口の言葉から垣間見ることができる。もっとも、本書評の基本的な論調は、さまざまな批判が清水によって出されているが変更の必要はない、というものであり、また最後に「文章作法上の問題で注文」(73 頁)をだすなど、若手にたいする書評としては辛すぎるように思えるが、これは期待を込めたものであろう。

「宇野没後 30 年研究集会での議論に思う」(『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』, 第 1 期第 4 号, 2008 年 1 月) について。「宇野没後 30 年記念研究集会」は、2007 年 12 月 1 日に武蔵大学にて開催された。記録では参加者およそ 160 名、第 1 部の基調報告は、鎌倉孝夫、大黒弘慈、小幡道昭、馬場宏二によってなされ、第 2 部では永谷清、河村哲二の報告にたいするコメントをふまえた討論がなされた。2023 年 10 月現在、第 2 期第 29 号まで発行されている『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』はこの研究集会を契機に誕生している。山口はこの研究集会の世話人の一人であり、Newsletter の顧問委員という立場にあった⁵⁾。この 2 ページほどの短い論稿では、研究集会での新旧を問わない各論者の発言についての山口の「思い」がつつられている。横川信治の制度派の議論、永谷清や馬場宏二の発言が取り上げられている一方、名前こそ出していないが山口の眼にはっきりと映っているのは小幡道昭の変容論的アプローチであろう。山口・小幡論争としてくりひろげられた「段階論の理論的必然性——原理論におけるいくつかのブラック・ボックス」(山口重克編『市場システムの理論』御茶の水書房, 1992 年 3 月) に端を発する論争は、その経過はともあれ、宇野学派内外にいまなお大きな影響をもたらしている。抜本的再構成を宇野の理論に要求しつづけてきた山口の理論が、同様にそれを 21 世紀に要求されているのであり、ここに学問の真の継承の意味をみることができよう。

書評「宇野弘蔵著／櫻井毅解説『資本論』と私」(『週刊読書人』読書人, 第 2728 号, 2008 年 3 月) は、宇野の著作集未収録作品を多く集め 2008 年に櫻井毅の尽力によって出版された『『資本論』と私』への書評である。内容はほぼ要約であって、山口理論に関連する発言などは本書評にはとくにない。はなしは若干それるが、この『『資本論』と私』のように、山口の単著未収録作品を集めた著書を出版しておく必要があるように思われる。本著作目録を一瞥してわかるように、未収録の著作には書評やエッセイのみならず、論文やそれに準ずる学術的な著作も多く含まれる。後進の参照の便宜を図るうえでも、また著作の散逸を

避けるうえでも必要な作業と考えられる。

「財政健全化志向のいびつさ」(『全たばこ新聞』全日本たばこ産業労働組合, 第1053号(通巻2747号), 2009年9月)について。1000字程度の短い文章である。この文章では、「財政支出の最優先項目は介護や救急医療, 雇用, 子育てなどでなければなるまい」(2頁)や、「日本の安全を真に脅かしているのは何かを考え直してみれば, 防衛費の削減策定は可能になるだろう」(同上)など, 単著ではほとんど見られない山口の現代日本にたいする考えが示されている。もっとも, こうした時事的発言は晩年, 別の媒体でなされていた。山口とその教え子を中心に2016年9月11日に作成されたFacebookのグループ「shigeの会」がそれである。これは気が向いたときに山口が時事問題はじめさまざまなことを書き込むような場であったが, 筆者にとっても大いに知見を得ることのできる場であった。残念ながら, 山口が亡くなったのちアカウントが突然削除されたため, 一部を除き山口の「shigeの会」での発言は永久に失われることになってしまった。

【2010年代の著作】

2008年以降は単著がないため, 以下, 2010年代の著作はすべて単著未収録の著作となる。

「小幡道昭の宇野理論批判」(櫻井毅・山口重克・柴垣和夫・伊藤誠編著『宇野理論の現在と論点』社会評論社, 2010年7月)では, 上述の「宇野没後30年記念研究集会」(2007年12月)における小幡道昭の報告とそれを基にした論文「純粋資本主義批判——宇野弘蔵没後30年に寄せて」(『経済学論集』東京大学経済学会, 第74巻第1号, 2008年4月)の前半部分のふたつの問題にたいする検討がなされている。ふたつの問題とは, 「宇野理論に対する牽強付会の誤解釈にもとづく方法論批判」と「大地殻変動」論にもとづく新方法論の提唱」である(145頁)。大変手厳しい評価であるが, この山口の検討にたいして, 小幡は反論として論文「不純化と多様化」(『マルクス経済学方法論批判——変容論的アプローチ』御茶の水書房, 2012年12月)を執筆する。山口のつづく論文「資本主義の不純化と多様化——小幡道昭の批評に答える」(『季刊 経済理論』経済理論学会, 第50巻第2号, 2013年7月)はこの小幡の反論に応じたものであり, 山口・小幡論争の事実上のピリオドとなる論文である。いま振り返ってみて, 山口・小幡論争の成果はどの点にあるのであろうか。ふたりの論文の応酬が長くかつ激しくつづき, またそのためであろうかこの論争に正面から参入する研究者もほとんどなかったため, 重要な論争であったことはたしかであるが, その到達点は論争の経過を追う限りでははっきりとしない。論争当事者の一方, 山口がなくなりたいま, この論争を総括する必要があるように思われる。なお, この論争にかかわる論稿として, 「宇野弘蔵の「過渡期」説について」(『宇野理論を現代にどう活かすかNewsletter』, 第2期第2号, 2010年11月)がある。これは小幡の宇野理解を批判する一論稿とみてよい。ここでは検討の対象として宇野の『経済政策論』, とくに改訂版の「補記」が扱われている。7

ページほどの文章であるが、晩年の山口の宇野段階論解釈が明確に述べられている。

「マルクス経済学と現代」（『武生郷友会誌』武生郷友会、第 118 号、2010 年 11 月）は、「私の少年時代の非行と現代」（2003 年 10 月）の第 2 弾といえるインタビュー形式での山口の述懐の記録である。不良少年が東大を目指した経緯やマルクス経済学を専攻した理由、高校の教員であった父親の影響、イギリス留学のことなど貴重な証言がなされている。また、インタビュアーの求めに応じて、マルクス経済学とは何か、景気循環論とは何か、自然環境と経済学の関連など、学術的な発言もみられる。山口が幼いころ、自宅に河上肇や堺利彦、大杉栄、改造社『経済学全集』、メンガーやマーシャルの本まであったというのは、生家が書店でさまざまな本に囲まれて育った宇野と同様である。なお、本インタビュー記事には、山口の若い頃の貴重な写真も含まれている。

「マルクス経済学の市場経済観と現代の市場経済」（菅原陽心編著『中国社会主義市場経済の現在』御茶の水書房、2011 年 2 月）について。山口は国士舘大学に勤務後、中国をはじめとするアジア経済の実証研究をおこなっている。『アジアにおける工業化の諸問題』（国士舘大学政経学会、1997 年 11 月）、「華人経済論 序説」（『21 世紀の展望』国士舘大学政経学会、2001 年 7 月）、『東アジア市場経済』（御茶の水書房、2003 年 2 月）などがそれにあたる。本論文はこれらの一連の研究の延長線上にある。『資本論』と宇野弘蔵から何を学んだのが説明されたうえで、現代の中国を含めた独自の段階規定が提起されている。

「伊藤君のこと」（『伊藤誠著作集 第 2 巻』社会評論社、伊藤誠著作集によせて NO 2、2011 年 4 月）について。「田舎の鈍才」の山口と異なり、2023 年 2 月 7 日に亡くなった伊藤誠は、山口いわく「絵に描いたような都会の秀才」（3 頁）である。日本学士院会員であり、また海外では Makoto Itoh として知られている。山口にとって伊藤はどのような存在であったのか、たかだか 4 ページあまりのこの文章から二人の関係性を推し量ることはなかなかできない。学問的影響はどうであろうか。山口と伊藤は 1970 年代から共著・共編のかたちで論文集を多く出版しているが、互いの学説に踏み込むような論文等は管見ではほとんどないように思われる。ただし一点、書評「伊藤誠著 信用と恐慌」（『日本読書新聞』日本出版協会、第 1713 号、1973 年 7 月）では、『経済原論講義』第 3 篇「競争論」を打ち立てるうえで最重要視角となる「競争論的観点」という用語が伊藤説に絡めてはじめて登場している。伊藤と山口どちらが先に「競争」を重視したかはどうでもよい問題であるが、同時期ののちの宇野学派の泰斗が二人、同じような問題を焦点としていたことは特筆に値しよう。直接の議論の掛け合いは著作上あまりみられないとはいえ、東大という場でともに研究するなか、さまざまな面で影響を与え合っていたことであろう。2020 年代初頭にこの二人を失ったことがマルクス経済学の衰退と傍目に映らないよう、宇野がマルクスにたいして、またこの二人が宇野にたいしてそうであったように、継承ではなく批判的継承が、再構成ではなく抜本的再構成がいま強く求められている。

「岩田さんの人と学問」（岩田弘先生を偲ぶ会編『岩田弘 経済学と革命運動』情況出版、2012年4月）は3ページからなる岩田弘の追悼文である。山口と岩田の関係が述べられたのち、世界資本主義と純粋資本主義、世界資本主義論と段階論についての山口の考えが示されている。山口は大学院進学後、すぐに病気になり2年間休学していたが、復学したとき、以前とは違う雰囲気を感じ取ったという。岩田をはじめとする世界資本主義論の隆盛である。この流れに少なくない宇野学派の研究者が与していくなか、山口が十分距離をとることができたのは世界資本主義論が浸透していった休学期間によるのであろう。純粋資本主義と世界資本主義の対立軸のなか、山口は世界資本主義の議論に棹差すことなく、また宇野の純粋資本主義論に関しても、その19世紀半ばのイギリスの抽象という歴史性を演繹的論理によって徹底して純化した山口独自の純粋資本主義論を構築していった。ただし、世界資本主義の影響が皆無であったと断言できるであろうか。山口が意図したかどうかはわからないが、山口のブラック・ボックス論には外的・歴史的条件をめぐる両者の議論の共通項が現れているようにも考えられる。宇野と岩田の理論的対比・検討だけでなく、あまり研究されていない山口と岩田の理論的対比・検討も、方法論をめぐる現水準の研究では必要なのかもしれない。

「現代市場経済分析と『資本論』（『月刊情況』情況出版、第4期第2巻第3号、2013年6月）は、80歳を過ぎて執筆された40ページを超える論文である。内容は、山口の『資本論』解釈にはじまり、『経済原論講義』の内容の説明や類型論の方法、現代資本主義における証券金融資本主義の考察など、山口理論の本人による要約版といえる論文となっている。この論文でも21世紀まで含め論じられており、また晩年に山口がとくに取り組んだ類型論に関しては、「マルクス恐慌理論の全体像と今日的有効性」（『季刊 経済理論』経済理論学会、第51巻第3号、2014年10月）もある。これは『資本論』およびヒルファディング『金融資本論』の恐慌理論の検討をつうじて、2008年金融危機に象徴される現代的恐慌現象にアプローチする論文であるが、同時に晩年の山口の描く類型論・段階論が明示されている。

「日本流通学会の歩みの回顧と展望」（『流通』日本流通学会、第34号、2014年7月）は、日本流通学会の学会設立25周年の特別講演の記録である。山口は1987年に森下二次也を中心に設立された当該学会の設立発起人の一人であり、初代副会長を務めたのち、90年代後半には学会長も務め、学会誌『流通』に三度「巻頭のことば」を寄せている（『流通』日本流通学会、第10号・第11号・第12号、1997年9月・1998年7月・1999年9月）。本講演では、日本流通学会設立の経緯が述べられたあと、流通理論に関する当時の学会の状況の回顧にあわせて山口の流通理論研究が回顧されている。近代経済学とマルクス経済学の流通理論については、「マルクス経済学の方がやはり大分上」（66頁）という評価であり、またコースやウィリアムソンの議論にたいしても同様である。また講演では、1960年代の日本流通理論史上、最重要論争と称する宇野・森下論争が山口によって語られている。山口はこの論争について、森下に軍配を上げるかたちで独自の商業資本論を構築していったのである。

が、この経過が明確に述べられている点で本講演の記録は貴重である。

「資本主義の歴史的・地域的類型の変容とグローバリゼーションからローカリゼーションへの循環的交替」(『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』, 第 2 期第 18 号, 2017 年 2 月) は、2016 年 9 月 2 日に新潟大学共生経済学研究センター主催で開催されたシンポジウム『グローバル資本主義の現在を読む』での報告を基にした論文である。公表された著作としては最後のものになる。研究報告としても、このシンポジウムが最後にあたろう。当時大学院の博士課程に在籍していた筆者は、山口のこの報告のコメンテーターを務めた。このシンポジウムについては、開催告知のポスター、シンポジウムの動画が記録として残されている。

【未公開の著作】

山口とその教え子を中心とする原論研究会のメーリングリストに 2016 年 4 月 11 日、菅原陽心をつうじて山口の「思いつきのメモ」なる 2 つのメモとその補論が送られてきた。ひとつのタイトルは、「市場経済と社会的生産の関係について —桜井覚書に思う—」であり、もうひとつのタイトルは「原理論での自然資源の扱い方について:」(ママ) である。前者には補論が付随している。前者は補論を含め 1500 字程度、後者は 1300 字程度のメモである。公開されたものではないため、ここではタイトルなど外形的な情報にとどめておく。なお、菅原の同メールには、「先生は「オンラインで諸君にコメントを書いて貰って、オンライン討論ができるとうれしいなと思っています」ともお書きになっております」と書かれていた。形式は多少違えど、コロナ禍以降のオンラインでの研究会を先取りするかのような提案がなされていたことに、改めて感服した次第である。

注

- 1) Shigekatsu Yamaguchi, 2022, "A Systematic Approach to Marxian Credit Theory Based on Uno Theory," Japanese Discourses on the Marxian Theory of Finance, Edited by Kei Ehara, Palgrave Macmillan.
Shinya Shibasaki, Kei Ehara, 2022, "What is commercial capital?: Japanese contributions to Marxian market theory," Capital & Class, 46 (2) : 235-256.
- 2) 日本のマルクス経済学における株式資本論研究については、柴崎慎也「株式資本論研究の展開」(『経済志林』法政大学経済学部学会, 第 89 巻第 2 号, 2022 年 3 月) を参照されたい。
- 3) 資本一般説的観点・競争論的観点については、柴崎慎也「利子論から市場機構論への転回」(『専修経済学論集』専修大学経済学会, 第 57 巻第 2 号, 2022 年 11 月) を参照されたい。
- 4) 柴崎慎也, 前掲論文, 2022 年 11 月を参照されたい。
- 5) 世話人としてのクレジットしかないため、山口が執筆にかかわっているのかは定かではないが、この研究集会の案内文「宇野理論を現代にどう活かすか——宇野弘藏没後 30 年研究集会のご案内」(発行年月日記載なし, 約 800 字) が残されている。